○世界婦人

本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

○本號目次

△婦人と政治　(一)　安部磯雄
△ヂャンダークの圖及畧傳　(一)
△聖書の一節　(三)　大石祿亭
△女子の任務　(三)　相良長雄
△椋のミハイロ　(四)　二葉亭
△鸚鵡　(五)　嚶生
△農科と理科　(六)　増田操
△隨感集　(六)　革田命作
△(ゴーリキイ著)放浪　(七)　某生譯
△罪惡　(八)　孤舂生
△病床雜讀　(九)　長加部生
△吾が叔母病む　(九)　岡野活石
△お婶さん　(十)　ふじ子
△旅行の色々(續き)　(九)　ひで
△海外時事　(一二)
△海内時事　(一二)

婦人と政治

安部磯雄

婦人が政治に關係することに反對する人は大概二つの理由を有つて居る樣です。第一は政治なるものが婦人の性質に適しないといふこと、第二は婦人に齊家といふ大義務があるから到底政治などに關係する暇が無いといふのであります。然しこれは至當の理由といふことが出來るでしようか

政治が婦人の性質に適しないといふことは、政治を餘程亂暴なるものと誤解して居るに原因するのではありませんか。恰も競技運動は男子の專有物で女子には適しないといふのと同一ではないかと思ひます。競技運動は或人々の想像する如く決して亂暴なるものではありません。體育といふ立場から見れば運動の必要なることは男女とも同樣であります。今日は女子でもテニスをやりボートなどをやるではありませんか。我國では今日でも女子が猶ほ薙刀とか柔道とかいふ純然たる武藝を練習して居るのです。政治も或點に於ては多少亂暴なる所がないではありませんが、薙刀や柔道に比したならばいくら婦人に適して居るかも知れないです。全體我國人の如く政治を恐れるものは他に比類があるまいと思ひます。啻に婦人が政治の範圍外に追ひ出されて居るのみでなく、學生なども殆んど政治に對しては門外漢です。文部省などは勉めて學生を政治より遠ざけるの方針を採つて居る樣です。これは慥に政治を以て鋭利なる刄物の如く危險であると誤解して居るに原因すると思ひます。如何にも政治は或意味に於て危險であるかも知れません。古來幾多の野心家は政治を以て種々なる罪惡を犯したのです。政治は多く善用せらすれして、少數者の慾を滿たしたり國民を虐待したりする道具となつたのです。然しこれを以て政治の眞相と解するのは大なる誤謬ではありませんか。我等は政治なくして一日も生存することは出來ないです。故に種々なる手段を盡して政治の腐敗を清むるといふ考がなくてはなりません

知識あり品位ある婦人が交際社會に必要なる如く、亦政治社會にも必要であると信ずるのです。

余は婦人が政治に關係することは、婦人に取りては其見識を廣くすることゝなり、政治社會に取りては其腐敗を清むることゝなるを信ずるのです

婦人は家庭に大責任を有して居るから政治に與る暇がないといふ說は全く取に足らないです。世には獨身の婦人もあり子女を有せぬ婦人もあります。亦多くの子女を有する婦人でもこれを保姆や家庭敎師に托し得る程の資産を有することもあり、亦其子女が既に成長して獨立して居るが爲め多くの繋累を有せぬこともあるでしよう。斯る婦人に對しては政治無用論を說く理由がないではありませんか。全體婦人は如何程家事に忙しくても毎日三十分や一時間新聞を讀み若くば外出する暇のないことはありません。政治に關係する者は朝から晩までこれが爲め奔走するものとは定まつて居ません。議員の如き政治を專門とする人は別として、單に選擧權を行して居る男子ならば、其政治の爲に費す時間は極めて僅少です。婦人と雖もこれ位の時間を政治の爲に費すことの出來ぬ筈はありません。されば時間の點から考へても婦人に參政權を與へぬといふ說は甚だ立ち難い樣に思ひます

要するに婦人を政治社會に入れまいとするのは全く男子の我儘勝手に由ると考ふるより外ありません、男子は自分等に都合よき法律を設けて居るのですもの、若し婦人が參政權を得でもしたら其こそ男子に取ては由々敷大事です。男子が女子を同等と見るの日が到來すれば女子が政治に與る樣になるのは明白です。婦人が議會に席を占むる樣になれば男子も自分勝手なる法律の製造は思ひ止まるでしよう。亦議場に於る議員の行儀抔も大分改善さるゝだらうと思ひます

ヂャンダーク

「ヂャンダーク」畧傳

ヂャンダーク(即ちジョーン、オブ、アーク)では誰れでも知つてる、一千四百十年の一月の六日、佛蘭西はローレインの一小村、ドムレミーの貧家に始めて呱々の聲を擧げた、第五子になるんだが、何分貧窮なもんだから、教育なんて云ふものは受けやしない、たゞ、羊の番をしたり、水溜のある所をアチコチ馬で驅けづりまわつたりなんかして、戸外の勉めに骨を折つて居た、

當時佛蘭西は、あの有名な、百年戰爭の眞最中で、バーガンデー黨(即ちオルレアン黨だ)と、アルマグナック黨(即ち非王黨だ)との葛藤は益々甚だしく、オルレアンの城は重圍に陥り、バーガンデ黨の會議もすに旦夕に迫つて居た、

ところがドムレミーあたりの民心は、ひとへにオルレアンの方に踴して居た、其の中にヂャンダークは成長したんだ、

ヂャンダークは幼少の時から政事上宗教上の事にかけてはそれは熱心なもんだつた、いつくまでも念を凝らし、思ひを馳けらせていつも「處女」の傳に心を潜める事が又馬鹿に好きだつた、特に、彼の女は此の佛蘭西王朝の危急を救ふものは、たゞ一人處女であるといふ一般の流言を飽くまで信じて居た、

ヂャンダークが天來の神託を受け、奇しき幻な現に見、妙なる音の聲をほのかに聞いたと云ひ出したのはたしか十三歳の時だつた、十八歳の時、自分は我が國のため君王のために、此の土に生れたのであるといふ事を確信した、だけれど、はぢめは皆んなから馬鹿にされたり嘲笑せられたりして居た、でも終にヂャンダークは、當時チャルス王の御座のあつたチノンに送られた、それからポイチエルズに送られた、で、とにかく彼れが處女であるといふ事が一般識者の信念を堅ふして士氣は大いに振ひ、ヂャンダークは王軍の一方の將となる願ひが嘉納せられた、英氣颯爽たる姿哉、武士が鎧ふべき甲冑を纒ひやさしき身につけてデウノースが旗下一萬の軍勢の眞ッ先に、歩武堂々、オルレアン圍める英軍を目懸けて、身も魂も捧げと乘り入る、手には聖、キャザリンの殿堂に浮世の塵や汚れを拂ひし白刃をかざし、矢玉の雨、つゆとしもおそれねば、流石名に負ふ英軍の精鋭も其の鋒を折られ、僅か一週日ならぬ間に、圍みも陣も破れて解けて、三月ばかりの中に王座はレイムに還御なり、「オルレアンの乙女」は武装して其の側に立つた、即ちヂャンダークの使命は全うせられたんだ、ところがデウノースは、其の名譽の失墜をおしんで向軍隊の中に止る樣に勧めた、そこでヂャンダークはその通りにしたが此の時がまあヂャンダークの全盛時代だつたんだ、後幾程もなく(千四百二十九年初冬の事だ)パリス攻城の時、卸つて反り打ちせられて傷いた、明けての年の春には獄屋につながれ、直ちにビユーベイスのダック、デ、ルキセムブルヒの陣屋に護送せられた、が一日脱獄し樣と思つて失敗しローウエンに遣られた、こゝでは頻りに歸敎して無罪を云ひ張つたけれども駄目だつた、ローウエンからは直ぐにパリスに書狀をやつた、パリス大學の判決は「此の如きは兇惡罪なるなるが故に火刑に處すべきものなり」といふ事となつて、一千四百三十一年三月末日、ローウエンの市場に薪木を高く堆み重ね、多勢の軍隊と、數多宗門の僧侶等が環視の中に、あはれ、一世の女丈夫ヂャンダークは煙に隠れ、火に呑まれ、はては冷たき灰となつてしまつた、其の冷たき灰は無慚にも海に捨てられて、つきぬ恨みの種となつた、

嗚呼千秋の恨事なる哉、其の怨靈はそれとか、はりあるよろづの物の上に重く止まつて消えはつることなく、彼れを渡したるバーガンデー黨の上にも、其の刑を許したる英國の上にも、その刑を執行し、其の人を助けんともしなかつた佛蘭西の上にも、はたまた其の復讐をしようとも思はなかつた天子の上にも恨はとこしなへに解けもせず消え果てもしない、

「彼の女はまことに其宗門のため、國のため君のために死せしものを、かくてはあまりにあさましかりき」とは誰れかの言だつた、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

英國婦人運動

英國婦人運動の團體に三個ある、フォーセット女史だとか、パンクルスト女史だとか云ふ學識あり才能ある婦人がその牛耳を執り、ステキに熱心な運動をしてゐる、中で最も激烈に運動してるのは、パンクルストの率ゐる「婦人社會政治同盟會」の一隊だ、現自由黨の閣員を惱まして居るのは即ちこれだ、陸相ハルデーン氏だとか、外相グレー氏だとか云ふ人が、屢屢公開演説をやるが、すると此の一隊は直ぐにその場所へ出かける、時あつてか、傍聽席の一隅から、突如花の如き婦人が立つて「婦人に參政權を與へよ」と叫ぶ「何故に吾れ等に參政權を附與せざる乎」と應じる、階上階下これに和して「婦人に參政權」を連呼する、すると演説なぞは、まつたく駄目になつちまふ、會主なんかの注意位ぢや聞きやしない、巡査が來て「何卒彼方へ行つて下さい」つて云つたつて聞きやしない、つまりは、皆つかみ出されるんだ、

だから此の頃では大臣なんかは、之れを懼れて公開演説なぞはやらなくなつたが、外相グレー氏なんかは、何度非道い目に遇はされたか知れない、去年、關稅問題か何かで氣焔を吐いて居たところへ女群の襲撃に遇つて、演説半ばで引き下つたこともあつた、

又、此の運動に對する迫害も亦中々烈しい、婦人達が公開演説で大いに婦人參政權問題なんかやつてると、青年學生の多數が、しきりにこの妨害をやる、又路傍演説なんかやつてると男子が來てまぜつかへす、それに隨分侮辱を加へることもある、

先達てのミッド、デヴォン州における補缺選擧は、隨分激烈なもんで。終に保守黨のベル氏が當選したが、此の時、婦人參政黨員は皆、自由黨妨害、保守黨應援となつたので、それを快く思はぬ輩は、一日パンクルスト女史が、路傍演説をしてる所へやつて來て、泥土を飛ばす、石を投げるてなわけで、パンクルスト女史は、頭に二ツ三ツの瘤を出來した上に全身泥まみれになつて其商家へ逃げ伏したと云ふこともある

議會開際のことであつた、久しく病をビアリッツの海邊に養つて居た首相カメル、バンメーマン氏がロンドンへ歸ると共に各大臣を召集し對議會策の會議を開いた第一日目、これを聞きこんで、これ等婦人運動者等は、早速面會に出かけた、ところがドウしても入れない、一女史なんかはスタ／＼中へ闖入しかけたが、巡査に押へられて果たさず、門前に居た二三の女子は豫め用意の鎖を出し身を門の鐵柵に鎖付けにしてしまつて大いに氣焔を吐いた、でも十數人でこれを解き放ち、警察へ拘引すると「男子の造つた法律に、女子の服從する義務なし」と、意氣頗る昂つた、

開院式の時は、政府方では豫め開院式拜觀は一切女子を許さずと云ふ掲示をしたもんだからこれ等婦人運動者等は非常に怒つた、終に鹵簿を途に要して直訴することになつた。そこで皆「婦人に參政權」と書いた小旗を風にひるがへして、行幸今や遲しと待つて居たが、巡査のためにこれも失敗してしまつた、

パンクルスト女史の同盟會の如きは、すでに二萬圓以上の基金を有し、事務費、選擧運動費に昨年だけで、一千五六百圓を費し、その會員組織なんかも頗る整備して、決して無責任なことはやらないんだ、其の所求に向つても、不撓不屈の精神が溢れて居て、政事家の重なる人々もつねに多少の同情は以つてるらしい、人は隨分これ等婦人運動者等を否難するけれども、彼れ等は決して面白くてやつてるんではない、殆ど彼れ等は狂せんばかりに、女權擴張を望んで居るんだ、その堅實なる行動、熱心なる言葉には誰れでも感ぜぬ者はあるまい、必らずしも運動の奇嬌に逸するのを咎めるな、同情を以て見よ、彼れ等は、やつぱり人道の戰士ぢやないか、我が國日本の婦人を見れば、これと反對に、實にツマラナイもんだ、人としての意氣地がどこにある化粧を凝らし、衣服を飾るのもよからうけれど、たゞそれだけで能事終れるとするならば其の人は虫にも劣る、モ少し「自己」を考へよ、モ少し意識の強い人間となれ、あゝ我が國日本の婦女！

海內時事

●女子の政談集會を許す

有志婦人の運動に係る婦人の政談傍聽解禁の請願は廿四日請願委員總會に於て左の法律案を提出する事に決したり

治安警察法中改正案

治安警察法中左の通り改正す

第五條第二項の「女子及」を削る

（理由）今や時勢の進運に伴ひ女子の敎育普及し其の思想發達せるにより婦女子の政談集會を禁ずるの要なし是れ本案を提出する所以なり

如上の請願は亦々請願委員會に於て可決したり

嗚頑迷固陋なる貴族院は尙女子を度外視するや否本紙は重復ながらも昨年の一月婦人の要求と題して聊か鄙見を陳述せしが今亦更に其要を摘載せん、

全體婦人が社會國家の一員たるに於て、男子と異る無きは何人も疑なき所ならん、婦人と雖も若し土地家屋等を有すれば、租稅を國家に納付するの義務あること男子と異ならず、罪を犯して刑罰を科せらるゝことも亦男子と異ならず、されば、婦人が政治の如何によりて、直接に利害を蒙ること、男子と些の相違なし、然るに我が治安警察法が、獨り婦人よりして政治的集會結社の權を奪ひたるは、無法沒條理の甚だしきものと謂はざるを得ず、されば是れ迄此の當然の權利の要求が婦人自身の口によりて大いに叫ばれざりしは、吾等の深く憾みとする所なりき昨年の一月吾社は數百名の同志を得て衆議院に其改正を請願し滿場一致を以て可決せられたり然るに頑迷固陋の貴族院は殆んど全會一致を以て是を彈劾す、故を以て今年も今井歌子女史等によつて請願書を呈出せられしなり、仄かに聞く目下尾崎テヲドラ女史も亦盛んに其運動に着手せらると、是れ自然の要求なり、如何に奴隷根性に染める婦人も、もう少しは自覺せざる可らず、日本婦人よ本紙二面の（海外時事）英國婦人の參政運動を一見あれ

編輯局より

△廿九日の日曜に新紀元の晩餐會を開かうと思ふて居ります處へ、金曜會の守田さんから、堺さん等の歡迎會を外山が原で催ふすから來いとの事であつたので、晩餐會は三月は、ぬきにして、外山が原の歡迎會に行つて、種々の餘興に歡を盡くし歸宅すると、田中翁の聲が聞へる、あゝ、お歸りか早くがした、餘程遲からうと思ひまして、一寸寢轉ばうと思つた所でがした、私も外山が原へ跡を追つて行きましたが、見當りませんでした、と、それから種々の雜談に移り、岩崎男も終に死にましたねへ、日本第一の金持ちでも壽命は致し方ありませんねえ、ほんに、人力で其命の寸陰も延ばし得んやですねえ隨分お金持だけに、大醫といふ大醫は悉く集めて治療に手を盡させ、患部を解剖手術するに殆んど顔面の如きは鼻も無くなる眼も脫き取つたとの事ですよ、あゝ、そうですかい、氣の毒な事ですな「境遇が境遇ゆへ、金が攻め殺しましたね、貧乏人にはまさか、そんな事は出來ません お氣の毒な」とは田中翁の言

翁亦曰く、乃木さんは、學習院長になられて、人道問題に深く根底を置かれた、實に結構です此頃の問題になつてる美人投票の當撰者を退校せしは、たしかに、大將が旅順を陷落せられしより人道の大功である、青年男女に腐敗の邪惡たるを敎ゆる當然の處置であると

大連より

當地の勞働者は殆んど支那人に占められて居る支那勞働者は日本勞働者より賃金が安く克く働くし亦使ふにも仲々克く動くが慾に掛けては亦實につるいところへ我が勞働者は日一日と增加して來る皆當地を生來有望の地として金儲けには來るだらうが大方失敗におちいつて居るのだ之れ支那勞働者が賃金安く働くゆへだ眞に對日清生存競爭の結果だ當地も此分で行けば亦米國と同じ樣に支那勞働者を排斥せねばなるまいと思ふがかりに實行するとせば米國が日勞働者排斥を憤慨する徒輩は餘程たな上げ主義の人だと思がね……そこで彼等失敗に陷つた勞働者は其の末如何なるかと言へば皆途方に暮れて終には惡の犧牲となり所謂生活難の爲め思はぬ罪を犯し犯罪者となる……嗚呼前途多忙なる彼等が國を出で立つ時の感や……今實に哀にも退輸命令と言ふ果敢なき身とはなれるのだ……が事によつては監獄の御厄介になる事も出來る斯かる逆境に陷つた彼等こそ實に生存競爭の敗者と言ふのだらう「嗚呼人生は天使の如き者だ」實に恐しい、はかない……亦其れかと思へば一方には滿足なる職業を有し乍から彩票に吃當つて喜び勇み飛び立思ひして歸る人も今迄少くはない。之を幸運の人と言ふのだらう……悲境の人……幸福の人……嗚呼社會は何故斯くの如き不對照を生ぜしむるのであらう（未完）　（勞働者）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

聖書の一節

大石禄亭

○私は近頃久しぶりで聖書を繙き、左の一節を讀んで甚く我が平素の信念を強めました。それで私は其感想を少しく玆に記して見たいと思ひます。

汝、若し供物を携へて祭壇に行きたる時、其處にて兄弟に恨まるゝ事あるを思出さば、其供物を壇の前に置き、先づ往きて汝の兄弟と和らぎ、然る後ち來りて汝の供物を獻げよ（山上の垂訓）

○私は是れを見て、我等神に賴り且つ世の改革に從事せんとするものが、信仰の基礎となすべき教訓であると思ひます、今の所謂基督教徒は我等を見て、餘り多く衣食の爲に思煩ふものだと嘲ります、物質偏重論者だと罵ります、而うして彼等は單だ神を信じ之を禮拜する事によつて、自ら生活問題も解決されるかのやうに教へて居ます。

○併しながら私が試みに彼等に問ひたきは、彼等が今の世の狀態を如何に見て居るか、又基督の垂訓を如何に解して居ると言ふ事です。彼等は靈魂に於て凡ての人は同じ神の子であり兄弟であると言ひますが、その肉體の生活に於ては統治むる人と統治めらるゝ人との間に月鼈も啻ならぬ苦樂の相違があり、使役ふものと使役はるゝものとの間に雪壤も尙は及ばぬ貧富の懸隔があるのです。

○今のやうな人間社會の關係が果して同じ神の子であらうか、同胞であらうか。否なく決して然らずと私は思ひます。例へば一家の内に於て兄ばかり旨いものを食べて居て、弟には何時も不味ものを與へるとすれば、これを何うして眞の兄弟と言はれませうか。又姉ひとり綺羅を飾つて居て、妹に襤褸ばかり着せて置くとすれば、それを何うして本當の姉妹と言へませうか。その如く經濟的に甚しい貧富の懸隔があつて、斷えず相爭ひ相戰つて居る今の世界人類を見てそれが均しく神の子であると言ふ事は全く虛僞であります。彼等の内ちで其富めるものは貧しきものに必要物を與へず、否な却つて其手より之を奪うて饑凍に泣かしめつゝ、尙ほ之を同胞であると言ふは甚しい誣罔であります。縱しさう言ふ兄弟姉妹が雲の如く教會に集つて禮拜するとても、神は爭で之を許容れ賜ふべきぞ。

○實に我等が神と交らんとする時我等の目前に提出さるゝ先決問題は、基督の教へ賜つたやうに「先づ往きて汝の兄弟と和らぎ」しか否やであります。若しも我等が心から同胞を愛すると言ひましても、其肉體の生活を保障するの道を講じてやらぬならば――精神的にのみ兄弟で經濟的には仇敵であつたならば――其人々の神に對する信仰は恐らく誠實なものでは無いでせう

○世間には又、自分のみ潔く保ちて他に恨まるゝ事なくば、たとへ他の同胞が何れほど爭うて居ても、私かに神を讃美して感謝の生涯を送れるであらうと言ふ――精神的利己主義――の人もあるやうですが、私は是れも亦甚だ不健全な信仰であると思ひます。我等は神の子として自分のみ「良い子だ」と言はるゝに滿足せず、すべての兄弟を和らぐるの責任を有ちませんか。社會の一員として我獨り拔駈の功名をせず、天下萬人の爭鬪を根絶せしむるの義務がありませんか。私はすべての人類が經濟の上に同胞とならねば決して靈魂の同胞となり能はず、すべての兄弟が精神的にも物質的にも相和らぐ時が來ねば、眞に神に近づいて之を拜する事が出來ぬと思ひます。是れ則ち我等が教會に入り神に祈禱を捧ぐるの前、先づ互に恨める兄弟を和らげんとて、社會的革命運動に身を委ぬる所以であります。

女子の任務

相良長雄

柳のやうなしなやかな體格に、錦を纏ふて蓮歩を運ぶ姫御前を見て、神々しさ天使のやうなと感ぜしはつかの間、やがて彼の姫君が、心も身も鬼のやうな旦那樣の御側に侍りて、奥樣となりすまし、自由の意志を彼れに奪ひ去られ蹂みにじられて、亡體を弄ばるゝかと觀ずれば、初めの念は何れやらに去つて只悲痛の感を增すのみである。淺く觀ずれば麗はしく、深く察すれば益憐れになさけなきもの實に婦女子の狀態である。吾人は婦人の眞情を洞察し、其不遇と薄命とを押つに涙の盡くるを覺ゆる次第であるが、靜かに思えよ世上悲苦の極は何者であらうか、そは必ず我意志を自由ならしめ得ざることならん、我自由の意志を自由ならしめ得ざるのみならず他人の意志、而も我儘なる男子の意志に弄れて、それに盲從し、屈服せでは叶はぬ現今婦人の境遇ほど悲慘極まるものが他にあらうか、かく言えば一見誇張に失するの詞の如きも、親しく現社會男女間の事情を研究せば、何人か慨嘆の叫びをなさゞるものがあらう。實に現今の婦人は恰も男性の虐待に供せらるべく生れ出でしものなるかの觀なきにあらず。娘としての女性、妻としての女性、母としての女性、彼等は此の間を通じて殆んど一度も其人格の存在を認められずして葬り去らるゝ狀態ではないか、現在の法律は婦人の權利を認めて男子と均しからしめず　道德も然り、宗教又然り、かくて婦人は終に男子の玩弄物となり、犧牲に供せられ終るのである。そもそも婦人は本來かゝる不幸の命運を荷ひて生れ出でし者であらうか、神は又婦人に授くるにかゝる不都合なる性質を以てしたのであらうか、仁は偏せず神はよこしまならずといふ、現今婦人の境遇を以て正に當然なりとなすは誤りなり。男女同權の聲漸やく高まり來つて婦人の福音を傳ふ蓋し必然の事といはねばならぬ。

婦人の人格を認めざる惡習は全く習慣性に驅られたる惡結果にして不合理極まる次第である近時漸やく婦人開放の必要を唱ふるに至りしは明かに文明進歩の賜と目すべく、而して此の潮流に掉して婦人の位置を進むべきは吾人々類の取るべき最大急務である、換言すれば舊思想を打破して新理想を實現すべきは目下の急務である。狂暴なる男性の專橫を制して婦人の面目を更め、互に平等の權利を享受しつゝ自由を均一ならしめ以て眞に平和の樂園を形造るは吾人の取るべき方針でなければならない。此の機に際して特に吾人が望む處は婦人各自の奮起努力である、同情なき男子に依囑して徒らに理想郷の出現を夢みるを止めて、須く自立奮鬪し、以て頑迷固陋の男子を悟入せしむるの覺悟と實行とを敢てせねばならぬ事と思ふ。弱きもの卑しき者との罵りに甘んずるは、二十世紀婦人のなすべき道ではない、婦人には婦人の本領あり、其本領を發揮揚するは婦人の本分である、その本分を遂行するは又實に婦人の負ふべき義務である、義務は果さねばならない、吾人は切に諸姉が一大奮鬪よく其責務を完ふして自己の領域を擴充すると共に、やがて人類の幸福を完成せられんことを願ふてやまない次第である。弱き諸姉の肉體に宿る強き熱誠と血涙とは、其目的を達するに十分なる資力たらんと信ずるのである。

旅行の色々（三）

ひで

毎年十月十四十五の兩日は吾が呱々の聲を舉げし生産神社なる酒折宮の敷地祭禮なれば同じ生產神社の敷地にある津下家にては吾を歡迎すべく其祭日を選びて招待の旨を申越されぬ、然るに澤田家には、毎年春秋二期に家内親戚團欒の遊興ありて、十四日朝未明より澤田山に蕈狩の催しあり、東京で觀られぬ遊興ゆへ、是非にとの誘引に其厚意默止し難く遠足に馴れぬ身ながら勇氣を振ひ起して、澤田家より凡そ二里斗りを距る蕈山へ到りぬ、由來幼少より心臟を病し身の登山は好ぬに非るも然も苦痛の方寧ろ甚しければ殆んど禁物といふ有樣なるに、くだらぬ勇氣を起して二里の道程は勇ましく疾驅して人後に落ちざりしも、いざ登りとなりしときは身體綿の如く、加ふるに神氣昂進して鼓動は早鐘の如く、最早や一歩も進む能はざれば、氣の毒ながら山の半腹まで女中に引つぱり擧げてもらう苦しさ、吾には遊興どころか苦痛の上乘したるものにてありし、然るに其半腹より蕈を見つけしとて人々はもう狂亂の態に血眼になつて探して居る事の我には寧ろ悲慘に感じたりし、姉上はと見れば、五十餘の身を以て小供と同じく何の苦痛もなく山の周圍を徘徊して獲られたる蕈を風呂敷に包みおもたげに得意然として、さも怡然たり、吾は意氣地なくも半死半生の態にて匍匐するが如くに辛ふじて絶頂に登り喫茶の用意せる老爺に賴みて毛布を借り其處に安居して胸の鼓動を靜めながら先づ四方の眺望如何ならんと望遠鏡もて秋天の澄み渡れる空の景色亦は老木新樹生ひ茂れる松林のさも油繪畫中の人たる如き感興を以て獨り喜悅がり居りし中に蕈狩りの先生達は、お辨當開きにとて續々と此處に集ひ來りぬそして甥姪達はおばさんは蕈を一本もようおさひなさらぬと揶揄し玉ふ然り一本も獲ざりしと吾は亦た得意然たり、吾が遊興の目的は御身等と異なりしぞとの心の呟きは彼等には通ぜざりしならん、吾は人々の歸途につくまで絶頂に在り、而して彼等の下山と見るや絶頂より急轉直下して、同勢に入り午後四時頃澤田家に歸り入浴して直ちに津下家の招待に應じぬ。

津下家に至りては、殆んど蕈狩りの苦痛も忘れたよう、種々の御馳走を荒して滿腹の頃、津下老女史は突然起つて、二十年前の所感を陳べんと、滔々數千言不相變流暢の辯を揮つて少しも疲勞の態なし、是か七十一歲の老婆の言なるかと顧みて吾身の意氣地なき漸汗の背を濕ほすを覺え侍りし。

女史は別に教育ありといふ人に非るも性來怜悧にして、記臆力強く先輩に質問せし事項の如きは少しも忘却せし事なく、却て是を十倍百倍にして演說の趣向をこしらへるといふ如き、一種の天才を有し其演說の如き、大學者も及ばぬ温容を以てせかず迫らず諄々として時の政府を非議し亦其夫を助けて有志家の群に投ぜしめ、自由黨員として重きを置かしめしは、女史の內助と外交の力に倚りしは舊知の友の首肯する處なり、其夫なる人は吾輩にては義太夫の名人にて多數の弟子を有せられ自分亦寄席に其技を賣せられし程なるに、自由民權の思想は其天才的藝術を放棄せしめ、一念其主義の傳播に勤め、此處の會合彼處の演說會と、夫婦をして餘日なきに至らしめしなり、吾は岸田俊子（故中島信行氏夫人）女史の來岡の節初めて同女史に會し女史の熱心なる專制政體攻擊の辭に感じ爾來岡山女子懇親會なるものを設立して女子舊來の弊風陋習を除き人權同等の自由權利を知悉せしめんとの旨趣の許に每月數回の演說或は討論會を開き、智識交換を目的とせり、此會の牛耳を執られしは、皆此老女史と（現代議士竹內正志氏の繼母たる）竹內壽子女史との兩人なりし。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

椋のミハイロ

(露國、ボレスラーフ、プルース作)

二葉亭 譯

鐵道工事も既う竣つた。雇人は拂ふべき手間を拂ひ、胡麻化される丈け胡麻化してカスリを取り、勞働者は皆一度に巳が村々へ歸ることになつた。

勞働の飯屋は臺前は大繁昌で、ビスケツトを袋に詰める者もあれば、土産にウオツトカを買ふ者もあり、又は其場で飲んで了ふ者もある。それから上着を畳んで、肩へ投掛けて出掛けると、口々に、

「そんだら、椋よ、達者で暮らせ――そんだら〳〵!」

――さ、椋のミハイロ一人になつた。

こちら向いても野の中に唯一人取殘されて、昨日迄の仲間が今日は散々になつて行く後影を見送るでもなく、蹌いたように光る線路を熟々と眺めれば線路は遠く〳〵走つて何處ともなく消えて行く。風は髪を吹いて着物の裾が捲くれ、今分れた人達の歌ふ聲が遠方で聞える――

その圓い帽子の影は軈て木隱れて見えなくなつたが、ミハイロは背後で手を組むで、まだ立つてゐる。何處へ行處もない。親兄弟もない一人法師で、今線路を切つたあの兎のやうに、或時は野宿したり、或時は人の家の納屋に寝たり行當りばつたりに世を渡つて來た身の上だ。

さ、砂山越しに汽笛が鳴つて、煤烟がむくむくと騰り、汽車の音がする。來たのは工事專用の汽車で、それがまだ普請中のステーションの側で停ると、恐強な機關手と其見習が機關車を飛降りて、突然飯屋へ駈付ける。汽車に殘つてゐるのは工事擔當の技師ばかりだ。技師は物思はし氣に四下を眺めて汽罐の蒸氣の音に耳を傾けてゐる。

見知り越しの人なので、ミハイロが丁寧に辭儀をすると、

「おゝ、椋か?――如何した?」

「如何もしましねえ。」

「何故村へ歸らん?」

「歸つたさつて、仕方ねえだもん。」

技師は何か鼻歌を唱ひ出したが、軈て、

「ワルソウへ行け、ワルソウへ。ワルソウなら、仕事に困る事はないぞ。」

「ワルソウつて何處だね? 私知んねえだが――!」

「貨車に乘れ。連れてつて遣るから。」

椋は貨車へ身輕くひらりと飛乘つて、石を積むだ上に腰を卸した。

技師が、

「旅行券を持つてるか?」

「無かね? 椋は一留と銀貨が四貫、外に銅貨で十五文ばかし持つさりますだよ。」

技師はまた鼻歌を唱ひ出す。機關車は矢張ぶう〳〵小言を言つてゐる――其中に先刻の連中が酒の瓶や紙包みを提げて飯屋を出て來て、機關方が機關車へ這上ると――軈て汽車は動き出した。

三里程來て一曲りすると、向ふの沼の中に森村が見えて、其處から烟が立つてゐる。之を見ると、ミハイロは急に燥ぎ出して、えへら〳〵笑つたり、遠方だから聲は屆かなかつたが、其方を向いて何か大聲に喚いたり、帽子を揮つたりする―― ブレーキの處に居た車掌が尖り聲で、

「靜かにしされ! 何だつて騷ぐんだ?」

「ださつて――ほら、彼處に見える――あれがウラ鐵の村だもん――」

「ウラ鐵の村なら村で好いから、靜かにしされ!」

ミハイロは大人しく言ふ事を聽いて靜かになつたが、何だか寂しかつたので、お經の文句を誦へてゐた。あゝ、生れた村は蕭條荒蕪の沼の中の寒村だけれど、此儘離れたら如何なに離しからう! たゞ、しかし、歸つたとて仕方がない。椋助だの鳥助だのと人は言ふけれど、ミハイロは能くも心得てゐる。出稼もして諸方を彷徨いてゐた方が、ひもじい思をしない、寧泊りする處にも困らない。生れた村には食物が缺乏て皆が難儀してゐるけれど、他處は其樣でもない。

ステーションを幾つか通越したが、長いこと停車してたる處もあるし、直ぐ發車した處もある。其中に日が暮れて、技師の情けで物を食はされたから、ミハイロは丁寧に辭儀をして禮を言つた。

行つても〳〵知らん地方だ。位地が高台になつて、瀬の早い川が逶迤と通つてゐる處もあつた。煙突も無い小舍や木の枝を編むで拵らへた納屋が後になつて、立派な邸や石造の建物が見える。生れた村では見た事もないやうな會堂もあつた。

夜に入つてから、或る山の下へ來た。山の上は町で、家が家に重さつたやうに累なり合つてゐて、燈火が星のやうに見える。もう夜更けたのに、何處でか喫鐘の音がして、人聲が絶えない。話聲や笑聲も聞える。村ではもう犬も吠かぬ時間だのに――

ミハイロはまだ起きてゐた。そしたら技師の指圖だと云つて豚脂を一斤と麵包を一つ持つて來て呉れて、それから砂を積むだ別の貨車に移された。今度は軟かで座り心地が羽根蒲團のやうだで、砂の上に座つて豚脂を食ひながら、

「世の中には甘い物が有れば有るもんだあ!」

汽車は久らく停つてゐたが、軈て明方になつて出ると、間もなく飛ぶやうに走る。と、森の中のステーションへ來て停つたまゝ、なか〳〵出ない。車掌の話だと、呼戻しの電報が來たから、技師は此處で降りるだらうと云ふ。

成程技師はミハイロを呼んで、

「巳はな、此處から戻らにやならんことになつたが、貴樣一人でワルソウへ行くか?」

ミハイロは口の中でぐづり〳〵と、

「さうさねえ、如何すべえか――」

「ワルソウへ行きや人中だ。餓えて饑くなりもすまいぞ。」

「餓えて饑くなつたさつて、仕樣ねえけさね。私一人だから。」

「構ひない! お袋が有るとか、女房が有るとかいふのなら、外に殘つた者が困りもせうが、一人切なら誰に掛構ひもない體だ。」

で、技師が、

「そんなら行くが好い。丁度ステーションの側に何軒か普請中の家も有るから、煉瓦でも運んで居りや、飢えもしまい。たゞ酒だけは愼しむんだぞ。さうして辛抱して居りや、また其中に何ぞ好い仕事も見附るだらう。さあ、一圓遣るから、正可の時の用意にしろ。」

ミハイロは一圓貰つて、禮を言つて、また砂を積つた貨車に乘ると、軈て汽車は出た。

逐々車掌に聞いてみた、

「旦那、私が今乘つてたあのステンションね、彼處からもう幾程來たでんべえか?」

「さうさなあ、百五六十里も來たらうか。」

「此處から歩いて戻つたら、幾何掛るべえかね?」

「さうさなあ、半月は掛るだらうな。」

と聞くと、ミハイロは心細くなつて來た。家へ歸るに半月掛る! 何だと云つて此樣な遠方へ來た事か。

やれ、大變な事になつちまつたと、始て氣が附いたが、もう取返しが附かぬ。尤も取返しが附いて當の身の上になつたからつて、些とも好い事はない、もつと不好い事もあつた――で、默反りを打つて、心の中で、

「仕方ねえだ。」

汽笛が消魂ましく鳴つたから、ひよいと見たら、向ふに家が澤山見える。

「彼は何ちふ處だかね?」

と車掌に聞くと、

「あれがワルソウよ。」

さう聞くと、また心細くなつた。如何して此樣な處へ來る氣になつたらう?

ステーションに着いた。貨車を降りて、車掌に暇乞して、うよろ〳〵と見廻して、それから向ふの酒瓶の看板の出てゐる見世の方へ行つた。固より酒を飲みにぢやない。其見世の先に普請場があつて、煉瓦職人の姿が其前に見えたから、技師の話を憶出して、仕事をさせて貰はうと思つたからで。

煉瓦職人は皆屈強の好い石灰だらけの若衆達で、先方から言葉を掛けた、

「お前は何だ? 何處の者だ? 此樣な帽子を誰に拵へて貰つた?」

なぞと云ひながら、袖を引張つたり、帽子を取つて叉ポンと冠せたり、ちやうまいばうにされて――ミハイロはうろ〳〵する。

「何處の者だつてば?」

「うらクオロコウ丼ツキの者だがね――」とまだ前を喰つてゐる。

面白がつた職人達は高笑をした。ミハイロも一緒になつて高笑をして、心の中で、

「面白れえ人達だ。些とも可恐え事ねえ。」

ミハイロの罪の無い笑顏や、人の好さうな顏色が皆の氣に入つて、升らずに眞面目に事情を聞出したから、仕事をさせて貰ひたいのだといふと、そんなら己達の親方に聞いて來なと云ふ。

「少とばかし剛氣いやうだが、人が好さうだ。」

と一人がいふと、今一人が、

「擽らせて見ちやうぢやねえか?」

すると又一人がミハイロに、

「錢りを附けるだらうな?」

「錢りツて何だね?」

「一杯飲せるかといふことよ。」

側から一人が笑ひながら、

「酒を振舞はなきや、此方から拳固を振舞つてやら。」

ミハイロは考へて見て、

「振れ舞ふよか振れ舞はれた方が好えね。」

言葉が皆の氣に入つて、帽子の上から輕く二つほど喰はせて、酒の事はお流れになつた。からして胴歌ひながら普請場へ來て皆仕事に掛つたが、職人達は見上げるやうな足場へ上り、女や子供が煉瓦を運ぶ。ミハイロは新参だからといふので、石灰に砂を入れて捏ねさせられた。

かうして漸く煉瓦職の手間取になつた。

翌日手傳の綫を一人附けて呉れた。矢張ミハ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

イロ同樣を貧乏人で、古ほけた頭巾に穴の開いた腰卷に、襤衣と、それで身上有りッ丈だといふ。色の淺黒い、痩ッぽちの、ちよッぽり鼻の空を向いた、額の引込んだ、隨分不器量な娘だつたが、ミハイロは女に掛けては贅澤でないから、此娘が道具を持つて側へ來た時から全然氣に入つて了つて、頭巾の蔭から瞥と面を見られた時には、何だか恍然となつた……はて、便りねえ身の上は己ばかしでねえ、一人法師が二人寄りや、もう一人法師でねえちふもんだ、といふやうな氣にもなる。段々大膽になつて來て、終には身の上話を始めた。

「汝何處の人だかね？　ワルソウの人だか、それとも迚と遠くの人だか？　いつから煉瓦積になつたのけ？」

なぞといふのが口切りで、最後は不覺深入して、

「何も心配しるでねえ。己が汝の分まで稼いでやるだから。」

成程汗みづくになつて自分ばかり働いて、娘にはほんの上面ばかり撫でるやうに捏ねさせて人前を取繕つて置く。

毎日斯うして二人で働いてゐたが、時々飛入りに手傳に來る職人があつた。此奴が手傳に來ると、乾度娘を叱り飛ばす、而してミハイロに調戯ふ。

ミハイロは夜は普請小舍の隅に寢る事にしてゐた。木賃に泊る程の贅澤も出來ないのだ、手傳の娘は外の娘達と連立つて何處へか歸つて行く、時には例の職人と一緒に歸つて行く事もある。其癖其職人は娘を口で叱るばかりでなく、動ともすると手込めにする事もあるのだ。

「何故彼樣目の敵にしるだんべえ？」と椋は不審に思つて、出來るだけ娘を劬つて遣つてゐた。娘の分まで働いて遣るばかりでなく、朝飯のパンも半分分けてやり、晝飯には乾度何かしら熅かな物を二錢が所買つてやつてゐた。娘は始終一文無しなのだ。

煉瓦を運ばされるやうになつてからは、番頭が喧しくて、もう娘の分まで働いてやれなくなつたが、其代り娘が躓きはせぬか、煉瓦の重味に潰されはせぬかと、始終其樣な事ばかり氣にしてゐた。其樣子を例の意地惡の職人が認めて、二人の事を彼此言つては調戯ひ、仲間中に觸れ廻る。仲間の者も笑つて、

「やい、椋、しつかりしろい！」

と足場から聲を掛ける。

一度晝時分意地惡の職人が娘を片隅へ呼んで何か聲を荒らげて言つてゐた事がある。

と、娘が泪ながらミハイロの處へ來て、十錢ばかり貸して呉れといふ。

何がさて娘の頼みだ、聽いて遣らん法はないと、ミハイロは財布の紐を解いて、稼ぎ溜めた金の中から、十錢丸を一つ出して遣つた。

その十錢を娘は意地惡の職人に渡したが、それからは娘は毎日乾度若干づゝの無心を言ふ事になつた。

「何故汝や彼樣した奴に錢遣るだか？」

と怯かな怐り聽いてみると、

「だつて仕方が無いンだもの。」

と娘はいふ。

或日意地惡の職人が番頭と喧嘩をして、仕事を止めて出て行かうとした。其時自分が止すばかりでなく、娘にも止せと、うぬが雇つた者のやうに、權高に言つたが、娘は澁つた。番頭が晩迄働かなきや手間は拂はないと、かう言つたさうだ。一文だつて汗の出た錢だから、勞働する身になつては、惜しい。で、娘はまた仕事に掛らうとした。

男は腹を立てゝ、大きな聲で、

「やい、一緒に行くのか、行かねえのか、判然返事をしろい！」

娘は煉瓦積む手を止めて、男の面を瞥と見たもう眼には泪を一杯溜めて居たが、それでも男の跡に隨いて行つて了つた。惚れてゐるのだ。

たゞミハイロには其が分らなかつた。

娘が居たからつて、格別嬉しい想をさせられた譯ではなかつたが、居なくなつて見ると、切りに淋しい。また一人法師になつて了つた。

其晩は眠られなかつた。翌日平生の通り仕事に掛つて見たが、仕事が手に附かない。普請場からがもう厭になつて來た。何處へ行つて見ても、何に觸つて見ても、眺めても、娘の事が想出されて、生別の辛さを稈と思知る。それだのに皆は笑つて、

「やい、椋、ワルソウの新造は如何だ？　氣に入つたか？」

（未完）

鹽鮭

嘯

『未だ出來ねえかな』……のなに鼾音を附けて男は欠伸しながら寢返りを打つた。

狹い泱水槽に女が一人、夕飯の仕度をして居る。襷も掛けずに、足には下駄と草履とを片方に突掛けて、見た處餘り本性とも思はれ無いが顔面の相と血色とで神經質の女だと擬め決めて置く。兎もすると肩で咳をして、其の次に水杓の柄を力任せに握つては桶の緣に打當てゝ見る漸と一杓汲んで、如何するかと思へば其儘流しに打散ける。見ると隅の方に菜の切屑が溜つて居たので氣に障つて又た水を掛けた。今度は手が倦るかつたのか、杓を桶の中へ投り込む。水沫が顔に掛つた時には齒を喫緊つて見た、何だか張合が無さゝうに思つて切殘しの澤庵を切り始めた。

緣の可成に闕けた茶碗三つと小皿大皿に鉢一つを重ねて持て來た。上框で右足の下駄を思ひ極り後の方へ飛ばして遣つた。其で些少は胸が透いた樣にも思ふが、さて火鉢の側で寢延つて居る亭主の面が忌々しかつたので、矢張卯逆さうに据え、茶碗や皿を叩附ける如にして併べる。火鉢を覗つて見たが炭團が疾に成つて居たので、火箸で無暗に掻廻して置いて、床板がギチ〳〵する程踏み附けて炭箱を取りに行つた。

とかくする中に家中が最早暗く成る、加之に土間の隅が暗い、足に觸つた物を蹴轉がした。雨模樣で少し濕氣味があつて腦が重く塞いで來る。苛々して『仕樣が無いな、まさ、火を點けないの……』とお粂は癇走つた。斷はつて置くがお粂とは此の女の名だ。すると裂口で憫然して居た十五六の娘が、漸々豆ランプを持て來た。其の動作が氣に食はんので、

「何だわ、小兒じや有るまいし、暗くなつたら火の一つ位點けたつて可いよ」

「……………」既う例の性分が出て居る。

「一寸言ひ附けると其れその通りだもの、口も利かないで惡らしい、何だつて遣り切れやしない、可い加減にお爲……」

「だつて、點けたじや無いか」

「何……當然さ、云はれない中に爲るが可い其れを恩に被せて如何する、眞に忌な娘だよ」と嚙んで跳いて「邪魔になる、他力でまだ済然するが可い」と邪慳に肘で突き除ける。而して自分は彌度も無い仕事を業々しく行ろうとする。

娘は自烈たく成つてランプを置いたなりで直ぐ裏の方へ行つた。常時大低は此んな調子だ。一體が氣短で頭痛持で、當擦りの甚い處などは母の血を餘程受けて居るらしい。それでも同僚の女工などが來ると、工場では皆なに氣受が可いと母に言ふのが有る。するとお粂は『だうして〳〵お前さん、宅では六敷しいの何のつて……』と答すのがお定りだ。

「政、お父さんを起しな、御膳だから」と態とらしく大きく呼んで、如何な容子をするか横目に見る。眠れては居るか、何と言つて叱るか一寸文句が出ない。いつもの辭で此んな時には額から首筋へかけて震へる。いづれ例の所爲だろう。ブツ〳〵言ひながら立つて、戸棚から鹽鮭を三片出して來た。一層の事土間へ打投けて遣らうかと思つたが、何だか機會が氣脫けして其れだけは止した。

男は起きた。未だ瞼が赤らんで醉が醒めて居ない。跌を組んで一服吹かす。顔に赤味があつて、眉の濃い頑丈な貌だ。呑氣な性質が直ぐ知れる。

「さあ、始めるかな」と箸を取つて皆を促した。娘も眠れて座つた。お粂は燒いた鮭を一片づゝ配つたが、自分のだけは迫めて面當に取らないで、漬物だけを食はうか、餘りと云へば餘りだもの、今日折角餘分のお錢が入つて樂しんで居たに、何時の間にか他所で酒を飲んで、宅へは鮭一片宛だなんて、何ぼ何でも堪へ切れやしない。なさゝむしやく〳〵思ひつゝ併べて居たが、いつの間にか自分の前にも一皿置いて在つた。でも其れには箸も附けないで澤庵を前齒でさも大儀さうに嚙んで湯を三碗飲んだ。而して飯は一杯で止して了つた。

「早えな、如何してだ」と男は問ふて見た。

「齒が痛くつて仕樣ないんだもの」と出放題に行つて除けて、順次に「あのお錢で斯んな不味い魚を……」と口先に出掛けたが、漸つと呑み込んで、其の代りに思ひ切つて面を顰めてプイと其處を立つたといふもの。

男は又かと思つて苦い顔して見て居つた。暫くして、「一寸其處迄」と云つたまゝ戸外へ行つた。例の貰ひ殘しの片附けだろう。平生は財布が輕くつても一向平氣な方だが、少しでも入ると直ぐ剛いて仕舞ふ。此れ迄も其んな事で悶着は絶えなかつた。それでも何を云つても一角の強情と來てるからお粂も態々で、面と向つては一言半句も出ない。で、其の側杖は娘の厄廻りと決つて居る。

娘が洗つて片附けて置いた茶碗をお粂は又た出して洗ひ換へる。大分癇癪が突つかせ、たが、割る迄に行かない。たゞ氣が苛々して自然に當り散らしたく成つて來る。偖て其の上如何するかと云つて、思ひ極つた事の出來る性質では無いらしい。といふだけ正氣の念が絶へず働いて居ると見える。一つは境遇に支配せられる結果でもあらう。

茶碗を拭き終つて、前垂で手を拭ひながら「政早くお寢みよ、明朝に早いんだから」と柄に無く口へ出た。可く有る事で、無暗に腹を立てると反つて心細くなる樣な事がある。然し自分では我を折つたと思はれ度無い、強味が未だ〳〵自分の方に有ると思はしてやり度い、で若し娘の方から先に口を切つて來たら、我方は默つて居るか、萬一返答するにしても成る可く應揚にして、自分の強味を見せてやり度いのだ。

默り通しで指の爪を嚙んで居た娘は獨りで床を布いて寢て了つた。暫らくは氣が沈まなかつたが晝の疲勞でいつしか眠り込んだ。

お粂は寂しい如な思がして暫く何かを考へ込んで居たが、火鉢の側へ居直つて炭を加いだ。而して先に殘した鮭を燒いて居る。飯櫃も出して來た。湯が冷えて居たので其れも沸かした。他に煮豆の鉢も一つ増へて居た。

飯が濟んで三十分程してから急に眠くなつたので寢る事にした。戸の割目から吹込む夜風が寒かつた。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科（九の續）

増田 操

農家の往々晩春の候、桑茶の嫩葉など時ならぬ結霜の後に於て凋萎の害を被りつゝあるを見るは事實ならんこれ細胞内の水分は氷るが故に其組織は一般に弛緩して緊張力を失ふに因り恰も夏日炎熱の爲に水分の不足に逢ひたる植物のやうに其葉凋萎するものである或は其葉の以前不透明なりし組織は多少變じて硝子樣に透明となり或は寒冷更らに烈しく漸く氷晶を增長すれば葉面の所々綠色を變じて殆んど白色の斑點を生ずることがあるこれ氷晶の爲に表皮を提起して其間に葉の氣孔より空氣を竄入せしむるからである若し溫度昇りて氷晶融解すれば再たび綠色に回復することがある、されど植物の種類に依つて耐寒性の强弱あるは勿論其部分の含有する水分の多少と其水分の不足に耐ゆる度合に關係するものである、彼の登熟せる種子は水分を含むこと最も少なく隨つて其抵抗力も强けれども水に浸漬する時は寒害に罹り易きは事實にして尙ほ蔬菜類の莖葉は水分に富むが故に耐寒性に弱く常綠樹の葉の一般に水分に乏しきも事實である

（十）

現代經濟制度に於ける總ての產業は人類の必要に應ぜんが爲ではない、唯資本家の金儲けの爲であるから少し商品の賣れ行が惡くなれば何時でも製造を手控へ若くは中止する、其結果として一方では多數の勞働者が解雇せられて失業者となる、これを生產過多の時代と云ふて居る、決して實際に生產が多過るのでない若し多過る程ならば社會總ての人類が衣食住に有り餘つて居なければならぬ筈だ、多數の貧乏人が常に饑へ凍へて居るから何物をも買ふ力がない、そこで需用が少なく供給が多く所謂生產過多と云ふことになる、斯く貧乏人が物を買ふ力のないのは資本家の目には需用者でないと思ふて居るらしい、個々人道を辨へたるものもないではないが餘まり慈悲や情けをかけるとそろ〳〵自分の足元が危くなつて金儲けが出來ぬ、謂する所營利の爲で人道も何もあつたものでない 諺に仁者は富ますとは實に至言であらう

農業上最も貴重なる肥料に於て彼の肥料會社が營利の爲に農作物に對し有害無益なるものを供給し或は無害無益のものを製造しこれを高價に賣つて農民を瞞着して居るものもあるこれ等不正肥料に就ては政府も多少氣が付いたと見へ肥料取締法などを施行してお茶を濁して居る同法第七條に依ると人造肥料の保證成分を百分の十五と規定してある如何に雜物を混合しても保證成分の十五%さへあればそれでよいとしてある過燐酸石灰と云ふは燐鑛石に硫酸を作用せしめて製造したものであるが我邦に於ける過燐酸石灰は燐鑛石に硅砂若くは石炭殼を混入しこれに硫酸を操作せしめて製造したものである、而もこの硅砂若くは石炭殼は何故に燐鑛石に混入するかと云ふと品質の優良なる燐鑛石のみを以て製造すると百分の二十內外の燐酸を含みたる過燐酸石灰が出來るからこの純然たる肥料に石炭殼若くば硅砂を混じて其品質を粗惡ならしむるのみである思ふて玆に至れば肥料商の奸策と農民の不注意とが農業經濟上に影響を及ぼす重大なることが分つて來る、ア、誰か自家の周邊に無限に存在する土砂に金錢を投じて購入することは馬鹿〳〵しい話でないか、過燐酸石灰中の燐酸成分を稀釋するのなら山の土でも畑の土でも溝渠の泥でも河の砂でも隨意に採つて混和することが出來るのである、所謂保證成分の十五%の過燐酸石灰を施用するにも堆肥又は圃土などを混じ容積を增加して作物に施す方便宜である位だから更らに肥料商に依つて僅かに稀釋して貰はなくても自分の方で勝手自由に稀釋して施用する方寧ろ得策で且つ經濟であらう

近來西に東に種々なる人造肥料會社勃興せしより自然其消費額も增加し來りたるは事實なれど農家の最も多く使用するものは過燐酸石灰にして北は北海道より南臺灣に至るまで殆んど使用せざる地なきに至れる如である、されど一般農家が能く過燐酸石灰の性質効用及び施用法などを知れるもの少なく只一時雷同的に使用し未だ全く其効用を實現せしむること能はざるものないとは云へぬ余輩が農家の爲に說明して見ましようが決して駄辯であるまいと思ふ、元來過燐酸石灰は燐鑛石、化石、骨類、及び海鳥糞の殘留物などには何れも皆な燐酸分を含むであるけれども燐酸三石灰の形態であるから不溶解性なるを以て肥料として施すも直ちにその肥効が容易に現はれない、そこで硫酸を作用せしむれば所謂過燐酸石灰となる其主成分は燐酸一石灰石膏（硫酸カリシウム）なれど肥料としては燐酸分のみなれば他方において必らず加里や窒素質肥料を加用せねばならぬ、そして速効肥料であるから追肥とするも良いが元肥とするには厩肥堆肥又は菜種粕、大豆粕などの有機質肥料と混用するが良い特に砂地には最も必要である、其主成分たる燐酸分は穀物及び根菜類に最も肥効あるものなれども燐酸一石灰の形態であるから水に溶解し易く隨つて流失の憂がある、稻田に施すには水を排して施用し二三日を經て灌水すれば良い又努力の及ぶ限りは一日施用してこれに土を蔽ふも良いのである砂土地は總て肥料の吸收力微弱なるものなれば一回に多く施用せず成るべく數回に分施するが良い、過燐酸石灰中の燐酸分は直接肥料として効力著しきのみならず速効肥料であるから生長期の短き作物に適するものなれど若し生長期間の長き作物には一回に多く施さず數回に分け施す方得策である彼の主成分たる石膏（硫酸カルシウム）は既に土壤に吸收せられし加里、アンモニア分をして可溶態に變化せしむるものなれば間接肥料として効がある、勿論過燐酸石灰の主成分は燐酸一石灰と石膏との二つの外に多少の遊離硫酸が含んであるからその酸性の爲に種子の發芽及び幼芽の發達を害する恐れがある故に成るべく播種數日前に施用すれば安全である、又これを貯藏するの久しきに至れば其燐酸分の少しく還元して不溶解性に變化することあれば成るべく濕氣なき低溫度の所に貯るがよい

既に說明せる如く化學的肥料なれば農家にして往々其正否の選擇に迷ふものがある、其色澤の如何を說明するも決して徒爾ではあるまい、過燐酸肥料は通常淡灰色を帶ぶるものなれども或は靑色又は綠色若くば黑色を帶ぶることもある其淡灰色のものは黑色のものに比すれば其効果薄弱ならんと云ふものあれども其黑色を呈するは淡灰色のものに比して其成分中に有機物若くは炭素の稍や多きを示すものであるから炭素は却つて土壤の溫度を保持せしむるに必要なる成分であるまいか、硫酸アンモ[illegible]）は靑色、綠色若くば帶黑色のものをして白色のものに比し其品質劣等なりと疑ふものあれども斯かる色澤は鐵及び礬土から現出するものにして鐵及び礬土は總ての土壤中に含有するものなれば肥料として植物營養上無害の成分である、要するに前述せる肥料中着色の如何は無害のものにして肥料の効力に關せざるものである

隨感集

革田命作

▲『女は女らしく、男は男らしく、子は子らしく、親は親らしく。』といふのが、卽ち日本在來の道德であつたが、今や殆ど有害無益の遺物と化つてしまつた。

予の考を以てすれば、男女親子共に、皆この『らしく』する必要は、毫も無いと思ふ。要は、只『人らしく』するにある。あざむかるゝ勿れ。

▲現社會に、神聖なる戀愛と勞働と云ふものは全く無い。故に人あり、この無きものを求めむとせば、勢ひ失望煩悶の境界に陷らざるを得ないのである。嗤ふ可きかな。

▲或人が云つた『婦人とは附人であつて、不人である。』蓋し附人とは男子の附屬物で一個の人格を備へざる義、不人とは卽ち人非人の意である。

現代の婦人が斯く附人と呼ばれ、不人と譏らるゝも、之れ畢竟現社會組織の然らしむる所である。

故に婦人諸君にして、衷心よりかゝる汚辱を雪がん事を期せむか、須らく起つて、現社會根本の組織を打破するに努めざる可からず。

然らずんば、婦人は永遠に附人である。然り不人である、思はざる可けんや。

▲處女時代に、至つて活潑なりし婦人も、一旦結婚すると急に、不活潑な人となつてしまふ。之が今の婦人の常態である。コンナ事では迚も婦人の權利は伸張されない。隨て其地位も改善される所は無い。

予は如上の理由に因つて、處女時代のみの活潑には贊成する事が出來ない。處女時代よりは寧ろ、結婚後の活潑を之れ願ふのである。

▲人前で食事をする時には、左迄小さくも無い口を故らに、すぼめて努めて少食の風を裝ふのを、無上の品位と思惟せる日本婦人位凡そ愚なものはあるまい。

コンな婦人に限つて、キツと臺所で二三時間も、摘み喰ひをするに定まつて居る。

予は日本の婦人が一日も早く、この摘み喰を止めて、人前で滿腹する迄無遠慮に食事をするやうになることを切望して已まぬ。

然り、此一事が僅かに、婦人解放運動の第一步である。

▲資本家の私有財產たる勞働者、男子の私有財產たる女子、兩親の私有財產たる兒女は之れ等しく無一物階級である、被壓制者である。

兒女先づ父母に叛き、女子は男子に、勞働者は資本家に背きて、玆に始めて革命、然り、燃ゆるが如き革命の赤旗は、天空高く飜るのである。あゝ〇〇、〇〇なる哉。（完）

わが佳耦よ、わが美しき者よ、起て出きたれ視よ冬すでに過ぎ、雨もやみてはやさりぬ、もろ〳〵の花は地にあらはれ、鳥のさへづる時すでに至り、斑鳩の聲われらが地にきこゆ、無花果樹はその靑き果を赤らめ葡萄の樹は花さきてその馨しき香氣をはなつ、わが佳耦よ、わが美しき者よ起て出きたれ（雅歌二〇自十至十三）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

放浪（三）

ゴーリキイ著　某生譯

グムゼロボールを經て、路をヤルターの方に採つてクリムに着いた、私は海に圍まれてゐる眼前の小さな陸に心を奪はれて、唯だ無言で歩を運んでゐたが、侯爵は吐息を洩しては、悲しい、哀れな眼色で種々な怪しい覆盆子をもいで空の胃袋を滿しながら、曾て彼が經驗した美食談を得意になつて語り、時々洒落を言ふた。

「僕の心に思ふてゐるとを發表したら、何位足が輕いか知れん、アヽ話さうか、何しやう」

一片のパンを買ふ錢もない、嚢中は全く空になつて了つた、唯だ未來の光明を望んで生活するのみだ、と徘徊恋悄者のやうな歩調で滑つてゐると、シャクローは急ぐ非難を始めるのであつた。實際彼が言ふ如く「一壓に三個の強口惡人」とは私のことであらう。

彼は絶えず私を五月蠅がらせた、殊に信ずることの出來ない食慾の話をしては私を惱ましたのである。

「何日か十二時頃朝食を喫つた時は、小羊仔を食つて、酒を三本飲干した、而して二時頃晝食を喫つたが、其時は大概日鋒にあつた種類を何の苦もなく退治けた、今記臆てゐるのは先づ、チャハフビラとチヒルトマが三皿、ピラブを大盤で一ツ、シャシュリクが一皿、君はトルマが好きだらうね、其他葡加索の料理を澤山食つて酒も飲んだ、隨分僕は食る方だろう」と終日彼は立派な料理の話に、眼を瞬やかし、舌鼓を鳴し、歯を露出して語りながら咬々歯を噛んだ。

彼は食慾に對する愉快な話に我慢が出來なくなつて、口からザラ〳〵涎を垂しては、それを呑だり甜たりしてゐた、私も最初は彼の面前を修はんがため、努めて忍んでゐたが、此時ばかりは全く相憎が盡きて嫌惡の情に堪なかつた。

或日、ヤルタに遠からぬ處で、斷落した木枝を片付けてゐる果樹園があつたから、其園に飛込んで日給前拂ひで雇ふて貰ひ、其のボルチニツクの金でパンと肉を買つて持つて歸つた時、園丁が喚ぶから、貢物を、頭痛にするだの、何處が痛くだのと種々な口實を設けて勞働を避けてゐるシャクローに手渡して、仕事の方に驅て行き、一時間程晩くなつて歸つた、シャクローの食慾談は眞理の版圖を脱しなかつたことを私は證明する、然し貢物は既うパン屑一片も殘つてゐなかつた、友情ある行爲とは思はれない、晩く歸つた因果であるから唯だ沈默して怒偶を忍んでゐた。

シャクローは私の無言に氣が付くと、彼は彼固有の什僻を固守し、爾來兩人は益々反對の方向に進み、私は絶えず働き、彼は種々な口實の下に勞働を避けて、唯だ飲み且つ食ふて私を窘迫めるのであつた。

私はトルストイ主義の人間ではない、其の日の勤務を卒へて、疲れて歸つて來ると彼は何時も薄暗い室の隅に蹲んで、食ひたさうな眼色で凝と私の顔を視てゐた、此の健かな野人の樣子は可哭くもあれば、赤同時に悲しい哀れな情に堪へなかつたが、然し彼は私の勞働するのを嘲弄したり、侮辱したりするので少々癪にも障つた。

彼は乞巧を始めた——彼の目には私は猶だ案山子のやうに映つたのである、最初施物を乞ふ時は、何となく羞耻やうに見えたが、韃靼人の村に近くと、彼は村民の吝嗇を知つてゐるので到頭眞者になり、殘廢杖に縋つて跛を引き、如何にも足の疼むやうな眞似をして他人の同情心を煽動した。

「君の眞似も可成り苦しさうだね」と訊くと彼は微笑しながら。

「僕は、働くことは眞平だ………」と簡單に答へるのであつた。

彼は醋樣しい物ばかり貢つたが、これから私の雨荷は殖えた、シャクローを看護するので日々に道が捗らなくなつて、終には輕押しの役を務めるやうになつた。

「君は僕を扶けて呉れるだらうね、扶けて呉れ給へ、とても僕はもう歩けない、アヽ、徒歩に馴れてゐないから、君は僕を殺しやしないだらう、苦しめりやしないだらうね、僕が死だら我家は暗になるのだ、母や父がどんなに悲むか知れん、友人が泣哭に違いない、涙を流す者が數人………」

此の話を聽く内に特種の思想が私の腦を刺戟した、何事も我慢して。彼が睡眠る時は其傍に屈し、靜な、スヤ〳〵と夢界に遊ぶ顏を看りながら、嘗ての覺悟を思ひ出した。

「此れが我が放浪の友——放浪の友——」

私の救助と旅行難とを彼が鐵面皮にも意識して請求したのであつたら、彼は雖に勝利を得た者である、然んな汚れた思想が私の意識に現れた、此の要求の中に性格が附着して、それが力となつてゐる、彼が奴隷のやうに私を使役する事にも拘らず、柔順に彼の跟班れとなつて、旅の寂寥を感じて佇立る時は、絶えず擬容の變化に注意して諫言を試みた、すると彼も非常に喜んで、歌を唄ふて私を慰めてはスヤ〳〵眠るのであつた。

其の後兩人は二三異つた方向を歩ぎ、而して彼に必用の品は能く注意して、金なり、パンなり何でも私の持つてゐる物を與り、兩人が出會すと、以前に私を不興がらせ、煩はせたに引換へて、懇ろに絶えず光輝突ひながら。

「君はもう僕を見捨て去つて了つたかと思ふた、ハハハフ、、ア、フア、フア、、」と云ふのであつた。

彼に食物を與り、而して私の目に映じた此の地方の觀察談を話し、突然バクチザライに就て話す時、機會を得たのでプーシュキンの或詩を引證して語つたが、悲しいことには彼に何等の印象を與へなかつた。

「エヽ、詩!、それは歌だ、詩ぢやない!、僕はグルジー人で、アートー、レスハウといふ人を知つてゐるが、彼は能く歌を唄う!、それが歌だ!、………其の聲は——アイ、アイ、アイ、………と高く唄う!、全然で咽喉に匕首でもあつて挤指るやうだよ………劇場主を刺殺して今は西伯利亞に流されてゐる—」

兩人が一所になつて後、私は再び沈思を要することになつた、彼の意見に付いても種々考へた、必竟るに私の飼を忍ぶことが出來なかつたのであらう、而して兩人の職業も永く續きさうもない、僅か一ルーベルか一ルーベル半で一週間の生命をたなければならぬ、之れを兩人で食ふとなると、餓死するより他に方法もない、シャクローの乞丐は生活費に對して決して經濟でなかつた、何でも夢別なく呑下す彼の胃袋が渺からぬ原因をなしたのだ、——葡萄房、甜瓜、鹽魚、乾果物、——等の食慾が時と共に益々増長して、非常な犧牲を生じたのである。

追々秋が近くなつたので、遠く行かないと益々旅行が困難になると云ふ、シャクローの注意に異議なく從つて、苦められながらクリムを出發した、私は半島の一部分を踏査する喜びと、彼方に行けば——金が得られる——といふ希望を抱いてフエオドジアの方へ道を逍遙ひ、而して乾果物に糊口する果敢ない未來の希望、新な運命が兩人の上を壓迫するのを覺えた。

悲しき未來!、兩人等しく望んでゐる希望の滿足は、彼等が既に其の趣味を失ふてゐるから忽ち實現せらるゝであらう。

アルシュカから二十ヴエルスト隔つた處に一泊し、シャクローの發意で海岸に出た、路は少し遠路ではあつたが、遠くから吹來る風を呼吸して、渺からぬ愉快を貪りながら、火を焚いて其處に横はつた、夜は實に壯麗で、青黒い海は下の岩に波打ち、碧空は默して高く浮び、瀞る森や樹木の枝梢は兩人を圍み、月は昇つて、樣々の楓の青い葉影を地に投げて石の上を削倒せ、名もなき鳥は絶えず清揚な可い調子で面白く囀り、彼等の鏡る同音は謹の靜かな物悲しげな、抑々鳴る響きに充ちてゐる空に消えた、浪の音が歡むと蟋蟀の聲が斑々と聞え、焚火は燗を揚げて赤や黄色の花束を造つて影を喚び、その影は月の影と倶に舞蹈を始め、快活に兩人の周圍を迷ね廻つて圍を展げるやうであつた、突然空中に不思議な音が響いた、海の天涯は空虚寂寥で一片の小雲もない——此處が地球終極かと思ふて、精神を遙はす蹤と無極の間に視線を放射つて………夜の壯麗美を悟つた、色彩、音響、芳香は、宇宙の調和を解釋するやうで、私の怯懦な感覺は心靈に充ち幸福を意識して心臓の鼓動高く、全身悄々、戰慄は容易に歇なかつた………。

偶然にシャクローが呵々大笑した。

「ハハハ………、何で君は左樣な歪しな顏をするんだ!、全然で阿呆のやうだ!ハハハ………」

電鳴に威嚇されたやうに吃驚りして、唯だ無愉快に堪へなかつた、シャクローは笑ひながら。

「お氣の毒さま」といふて笑泣の涙を溜したか私は實際泣きなかつた、帽は石のやうになつて凄い眼で彼を睨みながら何事も言ひ得なかつた彼は腕を抱へて土地の上を轉がるのであつたが私は此の重き侮辱に安んずることが出來なかつた、然し彼も後では内心に苦痛を感じたであつたらう。

「マア、僕の話を聽き給へ!」と私は激して叫けんだ。

彼は恐怖し、戰慄し、俳優を起して一時身の處置を忘れ、互に視線を交えた時、再び蝋な眼らして狂笑した、私は起上つて其處を去り、余く自己を忘れて、恐中で步行を續けたが、孤立と侮辱の辛い感情を覺えると同時に、大自然を抱擁し、彼の幽邃な、沈默した心に由て愛情を知つた、人間の熱烈な愛情、これが即ち詩人である………自然は私を感激せしむるがために、シャクローに如斯き性格を與へたのであつた。

大自然、シャクロー、生活等に對する彈劾の辭謂に耽りながら、遠く行かんとした時、シャクローは走足で飛んで來た。

「堪忍して呉れ給へ!」と私の肩に手を掛て厳肅で。

「君は一人でも能からうが、僕は到底も駄目だ」

彼は悪戲をした小供のやうに、惶怖な聲で云ひ、此奴大いに煩悶するなと、私が心付いてゐるにも拘らず、彼は顏に悲しい色を浮べ、中心は恐怖と狼狽に襲はれてゐた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

短篇「罪悪」(前承)　孤春生

雑草は早くも白露を置せたるにや　淸鮮いと深し。

今しも遠く遠々と響く時計の音、一つ…二つ…三つと數へて見れば早くも九時、門の閉まるが十時と聞けば、心ゆく許りの物語もならずと云ふて考ふる時は更になく、喫茶し菓子食ふ間も惜しと、果敢なき恋と我知らぬが儚、之は前来の話像にや、飛んで火に入る夏の虫戀の爲に焦け果てゝ、然にならふと燒け樣と竹子さんの爲めならと、燃れ切つたる一念に小煩惱の親元へこは安心の資なりと説明長く竪をえずも、分らぬ處が小怖さ、幕開打つた三日目に、金は百圓勉強せよと、血と汗とに閉りし短き文に附添えて、受けて取つたる小胸心、不意に称めく情胖めつ、あゝ嬉しいと顔笑ふ顔に、何を買ふてさ砕きし心は名のみ違はぬ色香の勉強、例へ目方は少くも　之れがよいわと金指環、出來たは立派な裝の物個着下駄穿いた伊達侯も、己れの指環は欲しからな、之れなら梅子も滿三尺、何れ説明は長々と脳に思ひし草枯れて、言ふべき事も會ふては皆へぬか浮世の常、村山光道只呆然……之れは詰らぬ物ぢやが……と、無駄の千言饒利の一句、聞いて吃驚するかと思へば、却つて優い教導……斯樣な品物戴いては濟みませんがせつかくの御志、無下なく御返しするもはいならず、おあづかり申して置きませう、以後はこんな事をなさるな……と食ひも食つたり美人の空言、腰掛には少し低いも心高くは來出ないが乘り心地が悪いわ……と云はぬ許りの申分、さはれ迷へる村山光道美人の尻腰背に負ふ嬉しさ、之れで充分弓矢八幡、口には云はね脳で祈念、今宵の指環は金矢に勝ろ、的でも當てたり美人の心と雲に乘りたる心地して心嬉しく語りける

「村山さん私ほんとに貴君と常に一所にいたいわね、貴君近い中に二人で寫眞を寫さして頂戴な」

「いゝとも此次ぎの日曜に寫さう、僕はやつぱり洋服の方がいゝかね」

「そうね、やつぱり洋服の方がいゝわ」

「そうかね」と上元氣、不圖柱に懸れる時計を見て忽に

「最早十時十分前だ、大分遅くなつたね、じや歸らう、閉らぬ中にな」

「アラ……未だ好いわ……」と淸々しい瞳子を輝かした

「でも明日は又學校があるから……」

「そう……」

「じやあ失敬する……」と靴を穿きかける。

「ほんとに今日は濟みませんのね、確かにおあづかり申してよ……」と頬笑みを洩らす

「はゝあ、詰らん物を……」

露は清輝を灑ぎて冴え、風は森林に洩れていさゝか涼しく、四邊寂として虫の音聞ゆ。男女の凉客、彼方此方に數知れず疎風颯と吹いて凉氣湛々電光星に耀つて閃々、月は碧空高く輝く

此處日比谷公園の松本樓にては、常になき大影況、銀色煙を吐いてシヤンペンを抜く音、彈の街に響かのやう

樓上の一隅に、少さき卓子を圍みつ、快談せる二人の青年……笑ひつ……語ひつ……且つ哀ぴつ……折々シヤンペンを傾つては、快談を繼いでる

「松本君暫らく無音して失禮だつた…」

「ウン。實際今日は不思議だ、登可君と此處で邂逅ふとは思はなんだ」

「そうだらう。無理はない、實際今日天の恵みだ」

「何うしてね」と松本は一杯グツと呑み干して

「何か功果でもあるのかね、そりや無論愉快じやがね」と云ひ乍らヒでライスカレイを混ぜ返してゐる

「ムヽ。實は其お互の煩悩を仕様と思ふのだそれ　君も知つて居らうが、問題と云ふのは戀愛問題さ、換言すれば櫻井對菅谷の事件だ」

「ウム。解つた。」

「君は懊悔するかね!」

「湯淺君とあらうものが變な口調をするぢやないか!」

「ウン。悪かつた、僕もやるさ、いや僕が先にやらふ。!」

「そりや愉快だ、大に語るべしだ、珍談奇話がさぞ湧き出づるだらふ。!」

「ムヽ。面白い!」

樓下の泉水清漪を濺ぎ、萬籟眞に凉蟲の如く、凉氣淸風に住みて街に充つ。松本と呼ばるゝ青年は疑ふ迄でもなく發雄で對手の青年は高等工業學校の學生で湯淺三吉と云つて機械科三年生である去年發雄が早稲田大學の豫科を卒へて間もなく本科(文科)へ轉ぜんとする時發雄は毎日上野の圖書館へ通ふてをつたが其時分から種々浮世話に心ひかされて親友となつたので當時は毎日會ふてゐたけれども、發雄が通學を止めて寄宿舎へ騒つてからはつひ遠いので學校の圖書館へ行くもんだから曾て會ふた事がなかつたが今宵不圖日比谷公園を散歩してゐると突然肩を叩くものがあるから誰れだらふかと振向くと久しく會はなかつた湯淺なので此次にと辭退するのを無理に引張り込んだのである處が話が思ひ掛けなくも花が咲いたので我知らず長い時間を過したのである。松本は微笑を洩して

「實に妙だ!」と云ひ乍ら次のシヤンペンの口を抜いてゐる　湯淺は天晴大勝手柄顔。

「それで僕は熱心に梅子を慕ふてゐたのだ、處が勿驚だよ!　彼れが賤ひべき淫婦たる事を認めたのだ、いやさ認めたのだ」と大得意。

「實際打開けて云へば僕は梅子を處女と信じた爲め十五六枚は撒いて終ふた、だが今となつては眞に殘念だと思つてゐる」

「然し湯淺君無論厭僞を口にする君ちやないが確かな證據でもあるかね……いや無論あるぢやらふが……其證據は何だね」と松本は口を入ると湯淺は呵々と背伴には稱讚き高笑ひ

「云ふ迄でもないさ、嗚しくも湯淺たるものが虚言を口にして何とせう!まあ聞き玉へ天下は最早僕の領分だ。はゝゝは。其第一の證據は大學生松本發雄君さ。まゝあ!　僕の云ふ事を聞き玉へ、第二は府城中學五年生でな村山光道と云ふ御仁さ　それで第三は斯く申す湯淺だ……!……」と一杯を傾けて

「梅子は第一に君が大學生であり且つは文科だと云ふ點に少からずまあ惚れ込んだのだ、それで君も大に腕を揮つた文通したはづだ處が間もなく湯淺と云ふ戀人が出來たので今度は僕の方へ余心を注ぐ樣になつた、けれど神ならぬ君が何うして之れを知らふはづがない、君の送つた物品も文章も皆僕に見せるんだところが何か却てお世辭には非ずだよ、實際戀文は大々博士なんだらう、僕も我壊は大切と思つたから眷りに君を罵倒したのだ、處が面白い彼れも一所に合槌を打つのだ、其時は眞實嬉しかつたそうだなそれから一ヶ月程はまあ僕の天下さ、處がやはり何時も猿腐冠者は絶えんと見えて、村山と云ふ奴が旗擧をしたのだ、さあそうなると何と云つても新手だ、到底僕に爭ふ力がないのでまあ先秀を糾取つたのだ、で梅子はせつせと村山の生血を吸てをるんだ、實に不都合な淫婦だと一時は僕も怒つたね、時には新聞にでも出してやらふかと思つたんだ、だが僕は少しく脳に考へがあつたから……それは梅子は邪魔事を云ふてゐるが何うしても君と秘密の交通はしてをると思つたから……止めたんだ、そりや仕方がないさ、僕は決して兎や斯う云やあ仕ない」

湯淺の口唇は乾き切つて終つたので又一杯傾けてゐる

「湯淺君戯談ぢやろう!　そりや僕も誤つて十四五枚は棄てたが二ヶ月間程でそれ以後は全々知らぬのだ、君餘り察し過ぎるよ……さ。」　松本は稍りにヒを捻つてゐる

「實際かね!」

「實際だ!確かだ!」

「ウム。じやあ話すがね、實は僕は彼れとは斷然絶交したのだ、然し君は未だの樣だが何うだらうあんな淫婦とは切つた方が得策ぢやあるまいか、そりや無論君の隨意だが……。」

「そりやわけもない事だ、書くともね今宵かう何と書くのかね!」

「いやそんなに急がんでもいゝさ、二三日の中に送つたら好からふと思ふ」

「ウム。そうだなあ、そう仕様。然し湯淺君全體梅子見た如な邪悪を犯す人間が何うして絶えんのだらふか!」

湯淺は發雄の言葉改めての質問に不審相な貌の解答としては多く語る要を見ないが少くとも

「はゝあ、大學生には不似合の質問だがまあ僕神を恐れ基督を信ずる力がないからだ、無信仰な人心には悪魔邪悪の風が吹く、之れも仕方がないわけさ、第一婦人が教會へ行かぬのが悪い梅子の如き其好適例であると思ふ!」

「はゝあ。不似合かね不似合でもよい君少しく世の中に罪悪の多い原因を探求し玉へ、未だ君の解釋は幼稚だ、そりや神を畏れ基督を信ずる事乃至教會に出入する事は必要に相違ない、之れに就て、少しも異議ないのだが、然し何教傳學の熱心な牧師が敬虔なる教會堂の演壇に立つて說教する時いやさ神が降臨し玉ふ場所に飢えて卒倒する者が出來るのぢやらふか、空飛ぶ鳥が時く事なく刈る事もしないのに飢えずに倒もしないでをるのに人の子否神の子たる者が食なくて倒るゝのであらうか、神は人類を守つてをるに違ひないが何故戮々と看過し玉ふか、但しは悔ひ改めざる爲めか、さらば悔改者が何程善にして、不悔改者が何程悪なるか、之れ僕の解せぬ處である、假令人類が罪悪を犯せりとするも可なり、さらば何故信者が君や僕の眼に映る如く罪深いのか、安心何處に、滿足、希望、平安、進歩はたして何處にあるか、僕としても君としても前よりか何程かは變つてゐるけれど決して聖別せられたとか、恵まれた實證を示す事は到底出來ない、僕だとて君と同じく基督信者と断もするさ、同じ事だ……」

假令われ豫言するの能あり又すべて奥儀と諸の學術に達し又山を移すほどなる諸の信仰ありとも愛なくば數ふるに足らぬものなり、假令われ我凡ての所有を施し又焚るゝ爲に我身を與るとも若し愛なくば我に益なし……愛は永久も隠る事なし然と豫言は廢り方言は息み知識も亦廢らん(哥前十三〇自一至八)

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

病床雜讀（二）

長加部生

◎「社會主義綱要」（堺利彦、森近運平共著）

共著とはいふが、實は眞接堺氏が執筆したのは唯だ最後の一章のみで、餘は殆んど悉く森近氏の筆に成つたものだといふ。章を分かつ十一いはく「社會の經濟的基礎」「生產方法の變遷」「現代經濟論」「社會主義の主張」「社會主義と農業」「社會主義と婦人」「社會主義と富者」「社會主義と國際戰爭」「社會主義の反對論」「社會主義略史」「社會主義運動の現狀」條理整然、文章明快、蓋し近來の社會主義書類中の好著たるを失はない。

◎今その第六章「社會主義と婦人」中の數節を摘錄して見やう。

「凡そ私有財產制度の社會に於いては、女子は、經濟上の實力ある男子に依賴して、その生活を支持するの外なし。古來經濟上の幾多の變遷あり。奴隸は農奴に變じ、農奴は今日の勞働者に變じたるに拘らず、女子の男子に隸屬する事は、終始一貫して變はる所なかりし也。故に今日の結婚なるものは、その名の美なると、その儀式の莊嚴なるとに拘はらず、女子のためには畢竟これ衣食を得るの道に外ならず」

「斯くの如く結婚は總べて經濟關係に支配せらるゝを以つて、眞正に結婚の原因たるべき青年男女の戀愛は、一大なる壓迫を受け、往々罪惡の一種とぞせらる。彼の婦人の貞操なるものは一切の事情と境遇とより來たる迫害に抵抗してその愛情の獨立を保つの謂ひにあらずして、或る定められたる一男子の前に自已の個性を沒却し、肉體と精神とを舉げてこれに仕ふるの謂ひ也」想はずや婦人諸君。

「これに反し、若し一女子がこの型式に從はずしてその戀人と會する時は、その戀情は如何に强くとも、その關係は如何に適はしくとも、彼れは直ちに不潔墮落の女子として恥辱の中に葬られざるべからず」戀愛を生命とする婦人諸君、爾は忍び得るか。

「今日の社會に於いては、中流以下の男子は容易に結婚の機會を得ず、彼れ等の多くは一婦人とその子とを養ふの餘裕なきを以つて、止むを得ず下等なる賣淫婦に就きて情慾の不自然なる滿足を遂ぐ、貧困なる女子はまた自已の衣食を得んがために、或は娘を財物と思へる父母のために賣られて醜劣なる業に從ふ。さればこの賣淫制度は、これを買ふものより見るも、之れを賣るものより見るも、同じく貧困の結果也。世の道德家風俗改良家と稱する人々は、その所謂醜業婦問題を以つて、その原因人心の醜惡なるにありとなし、口を極はめてこれを罵るといへども、未だ曾てこれが根本に遡つて、社會の經濟組織の不合理を論究することなし。何んぞその愚なるの甚だしきや」

觀察深刻、世のキリスト者、自由廢業論者、矯風事業家、何んぞ卿等の淺薄なる。

「思へ、女子は皆その生活の道を得んがために、自らその身を賣らざる可からざる今の社會也。適當なる機會を得る者はこれを一人の男子に賣り、然らざるものは止むを得ずして多數の男子に賣るの差あるのみ。一は正當なる結婚として是認し、他はこれを人間の墮落といふ。予輩その何んの意たるやを解する事能はず」

所謂貴婦人は高等賣淫婦也。

「婦人が今日の社會より蒙る害惡は、社會主義の實現によりて救はるべし。婦人もまた經濟的原因により發生したる一種の奴隸なれば、賃銀奴隸の解放と同時に解放せらるゝ外、適當なる手段あることなし」

區々たる改良何んの効ぞ。眞の自由、眞の解放は社會革命によるの外なし。

◎まだ拔粹したい個所は澤山あるが、左まではと思ふて已めた。特に「社會主義と婦人」中のみから摘錄したのは、本誌の讀者の重に婦人ならんことを思ふてゞある。予は切にこの書の廣く多くの同胞姉妹に讀まれんことを希望する。讀んで、そして諸君が諸君の屈從奴隸の境界に目覺め、奮然として起ち、毅然として諸君を繫ぐ鐵鎖を引きチギリ桎梏を打壞して、自由なる天地に脫出せられんことを切に祈る（三月二十一日稿）

吾が叔母病む

岡野活石

吾が叔母病む。彼女は今不治の病に取り附かれて冷酷なる死の手に渡されむとしつゝあるなり彼女が奴隸生涯の五十年、如何に淚多かりしよ幸少なかりしよ。この病、畢竟この間に於ける報酬のみ。勳章のみ。

彼女の嫁家は富めりき。鄕黨はその幸福を羨めり、朋輩は嫉めり、されどこの富こそ却つて彼女を困しむる桎梏とはなりたれ。富といふ墻壁もて圍める家庭の平和に幸福なるが如く見ふる裡、如何に冷たき風の吹き荒べる、偏見の遊ぶ[illegible]れる、己が里の貧しかりし彼女は口惜し淚に腸も張り裂く思せしこと幾回ぞ、加ふるに數多の小姑は近くに分家せるあり、未だ嫁せざるあり一人にても鬼の千匹に當るといふものを－さる中に、たゞ百歲を契れる夫の優さしき心のみ、能く彼女をして一切の痛苦、虐待を忍ばしめたり。

さはれ、淚は到底彼女の避くべからざる運命なりしよ－、彼女が三十二の秋、彼女が夫はかりその病より重き枕に臥したりしが、九月の末つ方葉末にすだく虫の聲々に恨を遺して、可愛の妻が嘆きも、西も東も辨えぬ一人娘の生先きにも心を留めず、男盛りの卅五才を一期として逝きぬ。

彼女は泣けり身も世もあらず嘆き悲しめり、生命と賴む大樹に倒れられたる姬蔦の、今は何が便らむ術もなし、四面楚歌のたゞ中に取り殘されたる羽拔鳥の援なきに忍び寄る小姑は總勢三人、かてゝ意地惡るく心足らぬ夫の叔父なる人の近所に住めるあり、姑舅を煽動しての包圍攻擊、嗚呼、彼女が萬斛悲哀の血淚は、悲憤痛恨の口惜淚と千萬筋の縞なして、乾く間とてなかりしなり。

叔母、盛りは少し過ぎたれど、未だ全く老ひたりといふにあらず、されど、一人娘の可愛しさと、且つは舊道德舊思想の深く〜染み込めるに、里には頑固一徹なる我祖父あり、さても歸られべうもあらざれば、如何なる迫害、虐待にも忍びて附夫に見えず、夫の家に死せむとせるなり。されど、また茲に彼女を苦しむる一事件こそ起りたれ。家に傳はれる數多の古金銀、夫の死後何處へ行きけん、影だに見えず、一家親姻の評定は、必定彼女が貧しき生家に密送したるならむと、一決して、寄りて集りては苛責拷問、或は間者を放ちて吾家の生活情態を探らしむなど陰險、殘忍、酷薄のあらゆる手段を盡くして耻辱し、虐待し、陷穽し、放逐せんとしたるなり憫に咲ける姬百合も、吹き荒ぶ雨風に鍛はれて熾烈となり、頑强となり、己が名譽のためには一歩も讓らず、些の畏憚なく、爭へり、鬪へり纖弱き女の身にこの大敵を引受けたる彼女の惡戰や、苦鬪や想察やるだに慄然たらしめき。されば敵の首將とも見つべき舅すらも、遂には彼女の境遇を氣の毒がりて、大にその鋒鋩を鈍らしたりければ、その[illegible]は、相[illegible]ぜるならむと[illegible]へり。

相峙すること年餘、その古金銀、さる思も寄らぬところより出でたり、此に至りては如何に厚顏無耻なる彼女の敵と雖も、到底降らざる能はざるに至れり、彼女は勝てり、眞に年寒くして松柏のいやが上にも色添ふを覺えぬ。彼女今は敵なくなりぬ、愛娘も年長けて旣に婿迎へて、家事を舉げて之を委ね、餘生を平和なる家庭の歡樂裡に安らかに送るべき日は來りぬ。さあれ天道は何方迄彼女を苦めんとはする－

數年前乳房に少さき腫物の出來たりしが益々腫れ膨れて、今は堪ふべからざるに至れり、田舍醫の何症なるやを診分け得ざりしかばかりそめの腫物ならむと、禁厭祈禱などして過ごしたりしが、去年に至りて、順天堂に佐藤博士の診察を請へり、嗚呼その症は何－此の症名を聞きては實に彼女は死の宣告を受けしなり、いとも性惡き腫物－癌腫にてありしなり。

嘗ては心にあらゆる痛苦、悲嘆を味はひたる彼女、こゝにまた肉の上に惡疾を得て、今これを切開するメッスの痛みを甘受せざるべからざることゝなりたり、彼女は大手術を受ぬ。而して左の乳房を失ひて生れも附かぬ不具者となり果てたり、さはいへ、これによりて餘生を平安に送らるれば幸多き終りなれども到底悲哀は彼女が一生を通ぜる運命なりしなり。

今春に至りてまたも頸部に腫物出來たれば、急ぎ順天堂に[illegible]りぬ、嗚呼憐の極、悲の極、治療するもせざるも同じなりといふ宣告を聞きては吾は九腸を千回萬回せしめざるを得ざりき、彼女が今の境遇は死刑を宣告されたる囚徒の、その執行の日を今日か明日かと待つにも似たらむか。

頃者飛信あり、患部化膿し、健康は日一日衰へつゝありと、嗚呼死に待たるゝ彼女は風前の燈にも喩えんか、道の霜、葉末の露よりも淡く果敢なき命を望なき此世に横へつゝあるなり。

嗚呼、叔母よ、叔母よ、御身は能く忍びたり、能く戰ひたり、されど、御身の鬪ひるは奴隸に甘ぜんがためなりき、よく忍べるは舊思想に屈從せんがためなりき、今は御身が此等舊思想、舊道德より解脫せむ道たゞ御身の前に橫はれる死あるのみ、オー死よ、汝こそたしかに囚はれの吾叔母をその鐵鎖より斷ち截る唯一の斧鉞なれ。

庭の春色

トボケ郞

椿が咲いて、ボケが咲いて、柳の花が散つて世界婦人社の庭も春の氣分に滿ちて、嫁菜が萌ゑて、芍藥が眞赤な首を出して、李の蕾が、モウ餘程ふくらんで來た、こないだ蒔いたクロヴアーの種が、チラホラ芽ぐみ出した、コスモスや、スウヰーピーや、それから虞美人草なんかは、まだ出ない、ドーしたんだらう、雛菊もまだ出ない、でも、おそろしく寒い冬をさも好いたさうなカラタチは、チヨビと、綠りを其の鋭い刺の叉から見せて居る、松も古い葉は枯死して落ちて、新らしい紫色の花がどの梢にも、尖の方にくつゝいてる、ニハトコの若芽が又頗る美はしい、可愛い菫も蕾を持つた、何しろ好い、椽側の柱に頰をあてゝ見てると我れしらずウツトリとなる、あゝ何しろ春だ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「お神さん」

ふじ子

濡手拭を指端にブラ下げて湯屋を出た。ゴーと寒風が高鳴りして熱てつた顔には心持がよい。路は凍切いて、油斷すると辷つて轉びさうだ。鮮かに深碧凍つた大空に未だ黄味がゝつた薄光が何處やらに漂つて、夫が紺青に溶けこんだ邊にも星が一つ、キラ〳〵と慄へて居る。往來の人顔は鮮明と脱出た樣に白い。ハツ〳〵と吐く息は尚白い。強く蹈みつける足駄の音は高う反響いて、時々キイ〳〵と齒の根が浮きそうだ。ミルクホールの硝子戸が絶えずガタ〳〵と慄えて、何んだか見るすべてのものが動き出しそうだ。自分の足袋を喚いで歩るく樣な婆さんでも飛び出しそうな日だ。

私は懐手に手拭だけは左の袖口からダラリと垂れて、横町を曲つて坂を下りる。最う手拭は皺張つてポキ〳〵と折れそうだ。もう〳〵と下から枯葉が一葉轉つて來る。ザアーと空が動揺めいたと思ふと、其葉が鼻柱へヒラリ一飛躍を試み、そのまゝ左側の板壁へ衝突つて、パタりと溝へ碎けた。思ひ切りの惡い木葉だ。夙の昔風に身を任せた筈だが、どう乘り出したものが今頃狼狽いて居る。其の淋しい干乾びた音が心の底に浸む樣だ。それでも氣になるので横から無理に手を出して鼻柱を撫でゝ見る。異狀が無い樣だ。後から忩がしい音がしてくる。危險な足取りだ。心配で振り返つて見る車夫の力さんのお神さんだ。赤ン坊を横つちよに背負つて何やら色の褪せた前掛に忍ばせて居る左手で一寸前を抑へて居るが吹き上げる風は意地惡う裾を捲り上げ樣とする、つぎはぎの紺足袋の上あたりに紫色に腫れ上つた樣な足をチラ〳〵と見せる。お神さんは背の子を一寸瞬り上げて、チユーと水鼻をすゝつて、すりぬける樣にして小刻みに行つて了ふ。お神さんは卅とか聞いたが、見た所廿七八位には充分間に合ふ。埃の積つた赤茶けた頭髪を無雜作に束ねて後れ毛が色澤の惡いドス黒い顔にボヤ〳〵と亂れて居る。朝、井戸端で見るときには細い不景氣な目尻は小皺を寄せて、それ相應の愛嬌を見せるが、言語が鋭くて、顳顬をピリ〳〵させて、首を些と傾け、口を歪める。これはお神さんの癖で、口を歪め細い眼で相手を睨むと此の特性を所も人もお關ひなしに矢鱈に振り廻はすのだ。女兒が三人あるが、五歳になる姉のお金ちやんはがつ〳〵に痩倒て居て青い冷たい萎びた顔には土用でも鳥肌が粟立つて見える。お神さんは鳥渡したことに癇癪を起して子供が玩物をいぢくる樣に、お金ちやんを叱る。お金ちやんは今にも絶えそうな細い掠れ聲でヒイ〳〵と泣く單調な聲でヒイ〳〵と一日位泣られるときには俺勢する。お神は行き廻つて來ては怒鳴りつけるのだ。誰かお金ちやんに觸つて例のワアーと泣かそうもんなら、暗い冷たい家から突走つて來て、例の歪んだ口で、噛みつく樣な非道い怒罵を喰ふのだ。

亭主の力さんとは常住喧嘩をやる。此の喧嘩で力さんが飲酒で文無で歸つたとが解る。

『えつ亦、お前さん始終々々醉拂つてさ、私達を甚麼して呉れるんだいツ！眞實に!!』

之は力さんが閾を跨けると頭から浴せかける定文句だ。お神の癇走つた聲に私達隣人は飛び立つ程喫驚するとがある。お神は上框に突立つて胸を抑へ、甚麼やら亭主を睨めて居る樣だ。力さんは酒太りにテラ〳〵した大きな顔に凄い笑を洩らして、またかと女房を睨め上げて居るのがマザ〳〵と見える。

『へえへえゝゝえ亦始めやがつたな………チヨツ』

「何んだい大きな顔を下げやかつて、眞實に……よく歸つて來たもんだ!!以前から常住そう言つてるんだ！大屋からは火の點く樣に取りに來る、八百屋も米屋も炭屋も來たよ。物價はお前さんの役無にや頓着なしにドン〳〵騰貴るんだ、それに…畜生はお錢を飲む樣な酒を喰つて陽氣なとを言つてやがる。私達を甚麼するんだい。役無奴！輕石奴！』と、例の何にから言はうと地團太踏んで眞向から浴せる。力さんの寢顔まで憎いと見える。

『へえ、氣の利いたとを吐かすねえ、俺が汗水滴らして儲けて飲むに何んの不思議があるんだ！？えおい箆棒！一日轉けつり廻つて儲けたお錢をよ、家に寢そべりかへつて居やがつて、やれ米だ、やれ味噌だと矢鱈に消費はれて堪るけえ、甘い酒でもグツと飲んで生命の洗濯しなくちや死んで了うんだい、利いた風を吐かすなえ、馬鹿!!』。

『おや！誰が何時何處で寢そべつて居たんだ！サア言へ吐かせツ何時寢そべつて居た！？畜生吐かせ………慳貪餓鬼共さえ拵えなかつたら夙に尻に帆かけて、お前の樣な泥醉者と頼まれたつて一緒に居やしねえよ。眞實に…畜生』と泣き聲になつたが、急に燃え上つた樣に、

『忌々しい。え 誰が慳貪餓鬼共を拵えた、お前が拵えてお前が食はすのあ當然だ、醉狂じやあるまいし、之ツ見ねえ、炭は粉もないんだお米はこれこの通だ』と、米櫃をガタ〳〵と邪慳に打たく。

『やい、馬鹿ッ幾ら打たきやがつたつて無えものは出ねえいんだ！糞阿魔奴縁喜でもねえ、ウヌ糞阿魔奴!!』

と、言ふ機會にお神はアツと叫ぶ。子供等はギヤ〳〵と火の點く樣に泣き立てる。

『糞ッ此の阿魔ッ生意氣なツ！』と憤怒の聲も恐ろしう響いて上框の底が打拔けた樣な音がした。ヒイと女の悲鳴がする。

『畜生ツサツ打てツ、殺せツ、役無奴！』と喚く。

力さんは其樣ことに無頓着で、車をヨタ〳〵と運んで行く。

這麼喧嘩は殆ど毎日の樣に演る。私は這麼とを思出して變な氣になつた。お神さん等は生活に疲れ切つて居るのだ。この疲れ切つた生命を湧かす樣に、彼女は常住熱々して、怒りほくつてガミ〳〵罵つて、而して喚き拔けば如何にもガツカリしたと言ふ風にボンヤリと萎びた顔骨の高い顔をして戸口にもたれて居る。而して誰が何んと言ふても目だけキヨト〳〵と動かして口をきかないのだ。力さんは柄にない氣前のよい男で、儲ける程の金は皆酒に入れ揚げて了ふ。醉拂つては例の俺樣は仲間中で一等多く政府へ税金を納めるものだと一日の酒量を吹聽して歩いて、皆なに飲力と言ふて可愛がらるのだそんなにした擧句、ヨロ〳〵と暗い長屋へ歸つて來ると病犬の樣な女房をとつかまへて喧嘩するのだ。彼等は這麼事を毎日繰返して行く――病犬の樣に痩倒て、垢だらけになつて、食ふや飲まずで夫婦が摸合ひして、隣家からは野獸の樣に嫌がられて暗い長屋の片隅で動いて居るのだ這麼にまでして生きねばならないのか？僅かの生活費………そりやほんの僅かなものだ、私等が月々支途つて貰ふ小半分にも當らないぢやないか。彼等は皮はいだまゝの大きな豚肉なんど見ても食ひたくは無いのか知ら、呉服屋の前を通つても自分の身姿を省ないのか知ら、子まで拵へる程の人間と生れて、其の日〳〵の危險い生活をしてまでも生きたいだらうか、お神さんがボンヤリ戸口にもたれて、考へるでもなく考へんでもないその姿は、矢張りそれ相應な悲哀を感じて居るのであらう。人間の生命欲程底の知れない意地の惡いものはない。いつそ彼の木葉の樣に彼等も人間を諦めて了へば面白いぢやないかと、湯上りの夢幻の樣な心持も夙に冷えて、言ひ知れぬ哀愁に胸が痛む樣だ。私は此樣見窄らしい男女を見ると、這麼捨鉢なとを思ふので、此のお神さんなんかは深い印象を與へる一人だ。お神さんは朝から晩までワイ〳〵喚き乍らも矢張り子供をへり出す。又叱る奴が一人殖えた結構だと考へてへり出しはすまい、砂にも砂の味があると言ふ樣に、子供をへり出すとに趣味を持つて居るのではあるまいか。一日何合かの米を漸と得て、何時か一個の肉塊をコロリと出すのだ………と私は眼を輝やかして大空を仰ひだが、急に獸になつて視線を落してお神さんの後を見た。お神の淋しい影の樣な姿は坂を下つて路次を曲つて居た。然し此頃はお神さんも少し靜かになつた樣だ、時々コン〳〵と胸に浸みる樣な空嚏をするのを聞くがもう人間の辭職には間もなからう。力さんも何んだか少し變つて居る樣に思ふ。お隣りの神さんが、力さん此頃の景氣は如何ですと云つても力さんは、へえ〳〵かせがねえぢあ………と淋しい笑を洩す樣になつた。從つて今までの樣な非道い喧嘩もない樣だ。

私は力さんの家の前を通る。灯が明々と障子にさして居る。力さんは上框に腰を下して頻に飯を流して居る樣だ。

『おや〳〵、お前さんもう食つて………お酒二合計りと鮭を買つて來てよ』と、聲がはしやいで居る。

『然うか………酒は寢酒にしやうよ。鮭を燒いてくんねえ、ハハー箆棒に薄片でねえか』と、聲が笑つてる。

『これでもお前さん、二錢三厘だつたのが今日は三錢なんですよ、眞實に驚いちもう。石油も亦騰貴たんですよ、大きな灯も點けられやしない………お湯注けましようね』

『………………』

『お金此方へ來いよ、寒いか………サアこれを食つて見な………甘いか、ハハハゝゝ笑つてやがる、お松、此顔を見い、ハハハゝゝ』

『ホゝホゝゝまアあの顔！ホゝホゝゝ』

『おい提灯を點けてくんねえ…、お松何んにも言はねえ、かせぐだ、ねえ、かせぐだよ』、と、言ひ乍ら障子をサツと引き開ける。光がすーと流れて出る。

『糞ツ馬鹿に寒いぢやないか』と、毛布を頭からくるくると卷きつける。

『全くねえ………』

力さんは一寸振り返つて家内を覗きこんでヨタ〳〵と行つて了ふ。霰がバラ〳〵と降り出す

（終り）

△爾曹は價をもて買はれたる者なれば人の奴隷となる勿れ（哥前七〇二十二）

△貧しき者はつねに忘れらるゝにあらず、苦しむものゝ望はとこしへに滅ぶるにあらず（詩九〇十八）

△今や斧は樹の根に置る、故に凡て善果を結ばざる樹は斫られて火に投入らるべし（太三〇十）

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

消息

某宛て

石川三四郎氏より

日月の去る事石火の如し、僕の刑期も餘す所二ケ月となつた、獄中の一年其日を數ふれば長くない事もないが、其間は常に感謝に滿ちて暮した事は今日になつて更に感謝を深ふする所だ△一昨日貴書に接し、兄が尚煩悶中に在るを聞いて、僕は思はずも同情の涙が溢れもドウもしなかつた△君は「自己を神に歸したい」といふ消極な話だ、一體「自己」とは何だ「歸したいと思ふ心」は何だ「歸したい」てふ心其物が即ち神の大慈悲の聲では無いか、君自身既に神の手中に在るのぢや無いか、コレでも感謝の心は起らぬか△君は「職業」や「物」に氣をモム癖がある、道元禪師曰、心外に佛を求むれば佛變じて魔となると、君は即ち心外に神を求むるのだ、君は今神といふ惡魔に魅せられて居るのだ△僕をして君の地に在しめば大に事業を擴張し大に金を儲け大に一家を勵まし近親を勵まして遣る、之が神に歸する眞の道では無いか倒れて死ぬ迄働ひて後は神樣の御勝手に委すのみさ△君は又、智識が邪魔になるといふ、甚しき不敬尊大の言ではあるまいか「智識」とは何だ、之も神の慈悲深い賜ぢやないか、吾等は之を益々啓發琢磨して以て吾心を神の明鏡臺とせねばなるまい僕は財産も智識も欲くて堪らないよ△君、二三日間愚童和尚が處へ行て來てはドウだ（尤も兩三日中に上京するさうだ）僕も出獄したら行く積りだ其時一緒に行うか△書籍種々難有い、此頃は頭が疲れて多くは讀めぬ、奥さんへ御無沙汰！△木下兄、久闊多謝△「新生活」一、二號、逸見兄より寄贈せられ拜讀せり、聊か所感を申上る△先づ體裁の地味なる處、其編輯の落着いた處、一見して甚だ嬉しかつた△然るに兄の文章を讀み了つて僕は多少カヌケの感無きを得なかつた僕の期待せるもの餘りに多大なりし爲でもあらうか△僕が自ら社會を代表して「新生活」の上に靈の糧を待望して居つた、然るに何ぞ計らん、新紀元以來の依然たる評論の刃に接せんとは△僕は新紀元の兄と新生活の兄とが少しも變化して居ないのを見て意外に感じた△魚行いて水濁り、鳥飛んで羽を落す、上するが是か、下するが非か、嗚呼天地の道、難哉、難哉、難哉△出獄したら大に眼のチリの數へッコをせねばならぬ△昨日は彼岸の中日でお團子の御馳走があゝました△俠さん千秋さん、出獄の時に澤山土産を持つて行くよ、といひたい處だが……△横田兄尚病宜しからずとか、困つたものだ、放心が何よりの治療法だと思ふ、出獄したら御見舞に行くよ然し其前に全快して貰ひたいものだ△土佐なる秋水兄亦病氣宜しからずと、書面を送りたいけれど遂に其機を得ないで殘念だ、早く健全ならん事を無神樣に祈つて居る△先日村田君の御來訪に接した、よろしく御禮を乞ふ△柴田兄近況如何△田中翁早大にて非軍備論を演説せられたよし、壯絶嬉しい△西川、赤羽の諸氏又々分離して新聞を出せしよし、困つた成行に成つたものだ、歐米の社會黨にも隨分、分裂問題に見苦しいのがある、併し長い時間を靜看すれば、此中に自ら人生の妙味が表はれて來る、再び某氏に僕の考は慥かに俗になつた、それはコウいふ譯さ、世に宗教家と政治家とが無ければ天下は永遠に太平であるといふ樣な考が出來たからさ僕は此頃宗教家ほど下らぬものは無いと考へて來た、農、工、商の勞働者が天下の主人とならねば神國の格臨は到底望まれない冀希くは諸兄姉の上に天寵の裕かならん事を

彌生の空に滿てる和光、
溫風を獄窓の下に樂しみつ、　石川生

鈴木千代巳氏より

春とは申ながら北海道などは未だの寒さきびしく候御社の益々隆盛なるは人道のために誠に喜ばしき限りに候此後もなるべく御健在の程祈り上げ候、小生は貴女樣とは未だ御拜顏の榮を得ざるも御主幹の世界婦人によりて屢ゝ高き御教訓を受けつゝある一漢生に有之候

如何に社會人道のためとは申しながら理想も主義もなく、たゞ權門富豪にこびて能事足れりとする今の世の暗黑界を輝さんには一方ならぬお骨折りと御苦心の程萬々お察し申上げ候、駄文の一つなりと書けるものならば、何かの材料なり差上度候へ共喰ふて寢て起きるを能事とせる小生には之れもなし難く、無用の長物とは誠に小生如きものに有之べく候

宮本繁次郎君なども熱心に世界婦人の購讀を奬勵いたし居り候へ共何しろ一般に頭一つ下れば一錢銅貨が一つひたいにくつつくなどゝ信じ居る所なれば、見向いてもくれやせず候、之れならばと目星をつけて折角送るとゝすみれはどうの、ほたんはどうのと仰せられて浮雲に乘られてる樣なお身振り、欲する所のすみれもほたんも今の世にはなかなかに得られぬのを御氣付なされずに、あせつてばかり居らるゝは誠にお氣の毒とも何とも申樣なき次第に候

當地某小學校に奉職せる教員中に相愛せる男女有之候ひしが、婦人の方は罷免せられ、男子の方は近々他の校に轉ぜしめらるゝことゝ相成候由、然れども二人は堅く手を執りて男子の新らしき任地に赴くべくとの事に候、此出來事は婦人の屬せる教會を騷せ候へども退會を命ぜらるゝ迄には至り申さず候ひき、此話をきゝたる時に何故に婦人のみを罷免せしかを疑ひ且つ憂ふるものに候、婦人は弱きものならんも、弱きものゝみをいぢめる、爲政者も亦弱きものに候はずや、

初對面？より甚だぶしつけな事申上げ甚だ相濟み申さず候

人道のため益御健全ならんことを祈り上げ候、　早々

蛇蝮の類よ爾曹いかで地獄の刑罰を免れんや、是故に我爾曹に預言者と智者と學者を遣さんに或は之を殺し又十字架に釘け或は其會堂にて之を鞭ち或は邑より邑へ逐害めん、そは義なる「アベル」の血より殿と祭壇の間にて爾曹が殺しし「バラキア」の子「ザカリヤ」の血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり、われ誠に爾曹に告ん此事みな此代に報來るべし（馬太傳）

半井桃水著　清方畫

新刊　小説　子寶

定價六拾五錢　送料金八錢

愛あり熱あり單へに情を以て寶とせる才子佳人を經とし、血なく涙なく唯慾を以て寶とする紳商母子を緯とし、産み出したる一双の子寶、見來つて世を警しむべく讀去つて人を訓ゆべし

發行所　東京本郷天神町二丁目　日高有倫堂

大賣捌　東京堂　上田屋　至誠堂　前川　大阪福音舍　寶文館　筑後菊竹

書畫骨董雜誌

一部金五錢十二部前金五十四錢
廿四部前金一圓（毎月一回發行）
第十八號四月一日發行
東京麴込東片町七十　書畫骨董雜誌社
振替貯金番號第六八八九番（振替貯金にて申込みは一口金一錢增）

道具不要　豆スープ　豆乳製法　附パン種製法

○全一冊　定價金五錢　郵税金二錢

其効や醫界の證認世の實驗家に依て既に明也兒童多き家庭多病者海員其他心身を勞する者は速に自製して心身の健康を保せよ一合の豆優に四合のスープを得

健康と經濟は富貴幸福の源泉也本書は簡單輕便製法を詳說す

目次　豆の營養價値○滋養食品分析對照製造法○固有の臭氣を除く秘法○化粧用應用○飲食物混用○附パン種製造法

發行所　本所區柳島町一　江川長壽堂
發賣所　神田區西紅梅町十二　中庸堂書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●最新刊●

東京女學館幹事 西田敬止氏校閲
香峯 山方石之助氏著

女子消息文格

前編 後編 全二冊

●梶田半古氏意匠 洋裝 頗優雅●
●實價七拾錢 郵税八錢●

女子の特性、女子の品格、女子の才藻は其容貌よりも其消息文に於て窺はるゝ機會多し。若し夫れ容貌の美と共に女子の特性を發揮し、其品格と其才藻の美を示さん思したまはゞ、必ず本書に由て先づ其消息文格を學びたまへと云爾。

發兌元 (東京日本橋通四角) 春陽堂

田山花袋

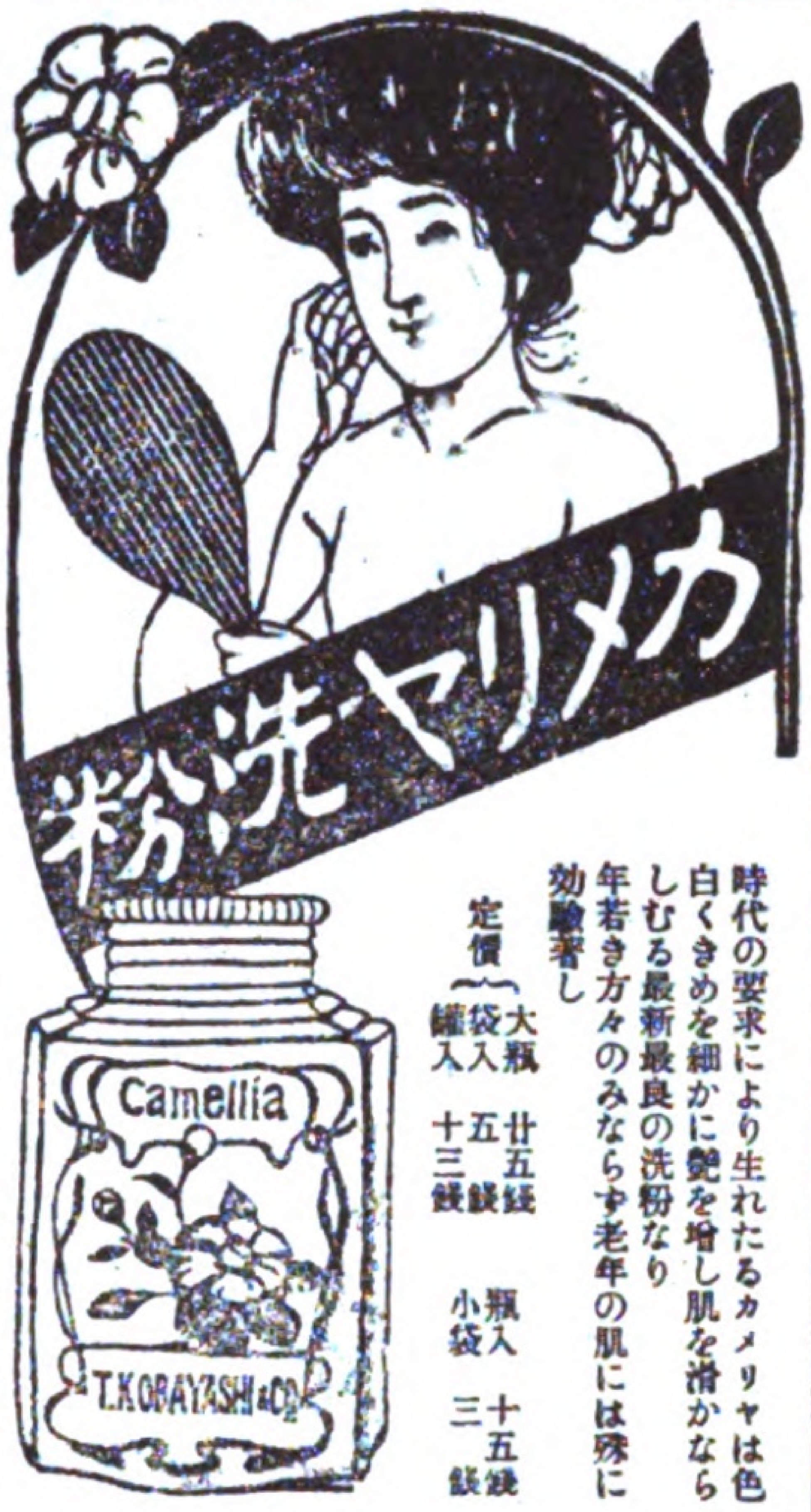
花袋集

自然主義の宣傳者にして自然派小説の泰斗たる田山先生最近の傑作蒲團一兵卒隣室春の町等悉くねめて本書に在り

定價九拾五錢 郵税八錢
布製美本 菊版三百廿頁

東京麴町區飯田町 易風社 振替口座一二〇三四番

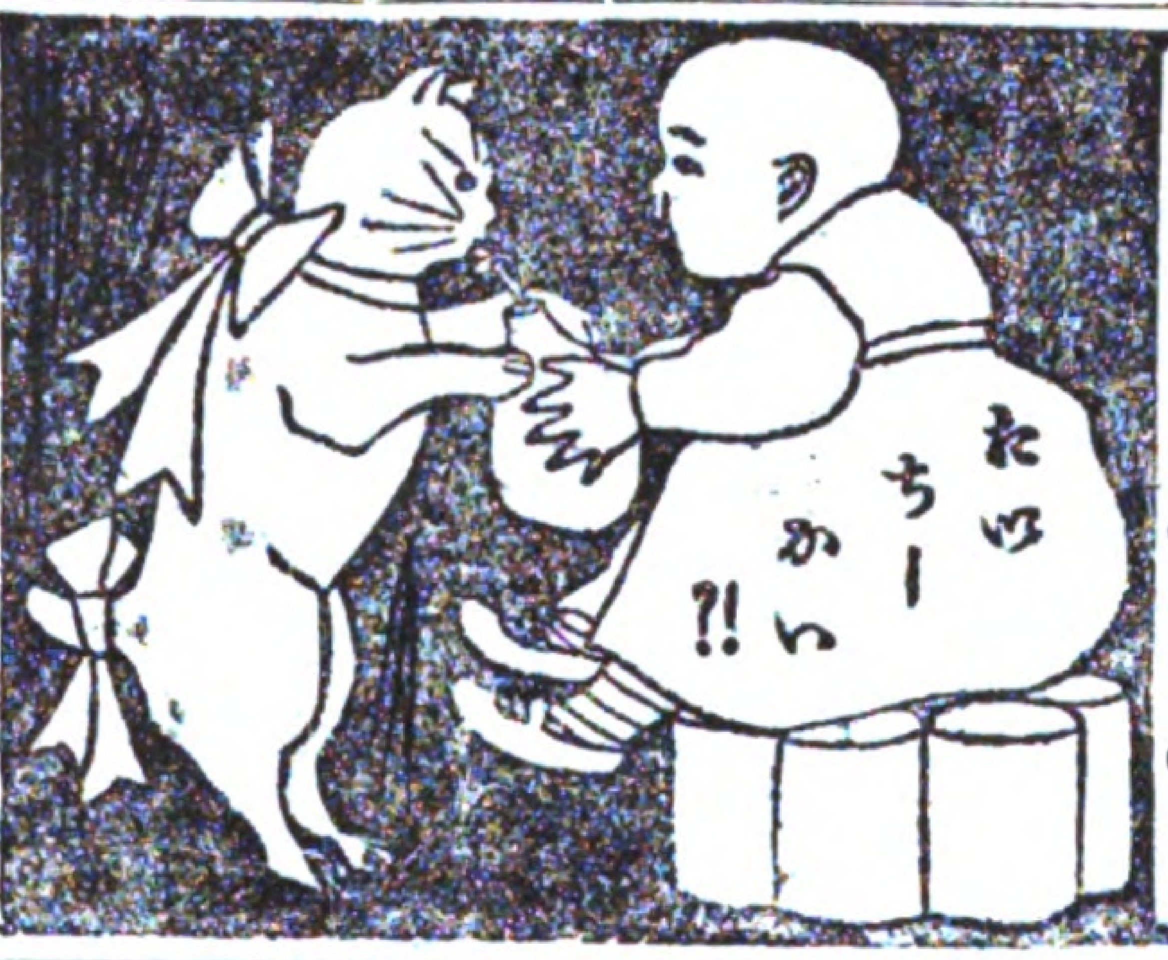
本舖 ライオン齒磨發賣元 東京神田柳原川岸 小林富次郎



時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價 大瓶 廿五錢 瓶入 十五錢 袋入 五錢 小袋 三錢 罐入 十三錢

伊豆三島 花島煉乳場製 名譽ある 金鷄ミルク



發賣元 東京市日本橋區大傳馬町 逸見山陽堂 (電話浪花二一五番 振替貯金口座三九六番)

本月

壹日貳日參日四日五日六日七日八日九日十日十一日十二日十三日十四日十五日十六日より三十日まで

天賞堂 神田 本店 横濱 春季大賣出し

●福引景品 第一種一等 三越呉服切手金五拾圓宛 (一本もカラクヂなし景品割合は別項記載の通り)

●福引景品 第二種一等 天賞堂商品切手金拾圓宛 (一本もカラクヂなし景品割合は別項記載の通り)

●第一等三越呉服切手金五拾圓宛三十枚

●第一等天賞堂商品切手金拾圓宛三十枚

●齒科治療●

齒科醫 吉瀬才市郎 東京神田須田町二十六番地

自午前八時 至午後六時

●學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額
●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候

小兒科 內科 婦人科

毎日 自午前八時 至午後六時

小牧醫院 淺草區馬道三丁目

註釋增訂六版

英譯不如歸

德富芦花原著 塩谷榮譯

定價金六拾錢 郵税金六錢

本書の如何に好評なるかは最早云ふまでもなし。今や六版を發行するに際し幾多愛讀者諸彦に報ひんが爲めに特に五十餘頁の詳註と附錄とを加へたり。これ本社が英語初學者にも其の興味を傾たんとすると同時に、知らず〱勉學せしめんとの微衷に他ならざるなり。詳註は本社英學界編輯局の手になりたるもの、其の親切、丁寧、而も精確なるは、其の雜誌「英學界」獨特の長所なり。英文を解するの人、和文英譯を研究する人、若し一書を座右に置かば其の得る處や、蓋し至大なり。

東京丸の內 有樂社 振替口座三六〇

◎定價 △一部六錢○十部八十五錢○二十部壹圓 △申込は總て前金の事

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 神崎順一
印刷人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 遠藤友四郎
發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人社
印刷所 東京市京橋區新富町六丁目七番地 活文社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY